神が与えた最期の試練

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神が与えた最期の試練

【Ｎコード】
Ｎ７４９７Ｖ

【作者名】
鷹崎　弘

【あらすじ】
至って平均的な高校生だったはずの俺はいきなり見知らぬ森にいた。そこには勇者、魔王、神、悪魔、魔術、錬金術等々、と言ったありとあらゆる非現実があった。
それもそのはずだった。この見知らぬ場所は俺のいた世界ではなかったのだ。
そして二年間の月日が経ち、俺は力をつけ、冒険者ギルドに入り？入らされ？目的のために戦い続ける。

笑いも入れていきますが、シリアスな雰囲気も中々に多めな物語です。

〈０１〉俺の名（前書き）

「化物勇者の英雄記」を書き始めました。
第一話は１０月１０日０９時に投稿します。

本音を言うと、こっちが本命です。

「神が与えた最期の試練」よりも先に見てほしいと思っています。

〈01〉俺の名

死。

十六歳の俺には全く関係の無い事だと思っていた。いや、俺だけではなく若者は皆、そう思うだろう。して、本当に死ぬ時は、まさか俺が……と思ってしぬだろう。

そういう俺も、もうすぐ死ぬ。

理屈ではなく、感覚的、本能的にわかる。俺は死ぬのだと。

死ぬ直前になると色々と思い出す。今まで大変だった事、楽しかった事。まるで自分だけが違う刻を歩んでいるように。…これは俺の憶測だが、走馬灯と言うやつだろう…

いろいろ大変だったが、楽しくもあった。それがこんなにもあっけなく終わるとは思ってもみなかった…

自分が走馬灯を視ていると思うと改めて、俺は死ぬんだな、と思う。

今は痛みはない。しかし、それが激痛によって感覚がなくなってしまったのか、死ぬ前はこのような感じなのか、そんなことはわからないけど、穏やかだ。

俺はこうして死んでいくんだろうな……

……

…いや、だけど、やっぱり死ぬのは怖いな。

怖いと一度考えると、どんどん死が怖くなる。死にたくなくなる。

彼女はできなかった
童貞だった。
好きな人もいた。
告白するべきだった。
親孝行もまだだった。
したい事もあった。
…いっぱいあった。

よくよく考えると後悔ばかりだ。ああすれば、こうしたら、と過去の俺を責めた。そして俺の中にはもう、一つの思い以外は無くなった。

…死にたく、ない。

死にたくねぇよ。

感覚はないが、たぶん、俺は号泣しているのだろう。涙を出して、鼻水を出して、よだれを出して泣いてるのだろう。

生き…た、い…

俺は最後にそう思って、意識を失った。

べっっっろ。
俺は何か生暖かい物に頬を舐められた様な感覚と共に目覚めた。
俺はまだ意識がはっきりとしないが、周りの状況を知るために辺りをキョロキョロと眺める。そこは見渡す限り木、木、木。それと何かの生物がいる。
…コイツは犬か？犬なのか？
周りの様子からここは山や森の中なんだろうけど、この犬っぽいのは何だ？？
そいつの体長はまるでチワワの様に小さい、明らかに何かの子供だろうが、全身の太さは断然コイツの方が太く、毛は真っ白できれいに整っている。
だが、顔つきが少しおかしい。
確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。
「きゅ〜〜？」
と鳴きながら俺の顔に頬をくっつけてくる。俺の顔を舐めたと思われるのは、コイツだろう。
……だがそれよりも…
「これは羽根だよなぁ？」　俺はこの生物の背中にある鳥の羽根の

ような物をつまんでみた。
その羽根のサイズは身体の大きさを考えると中々のものだった。
…犬とトカゲを混ぜた顔みたいな奴で四足歩行、白いふさふさの毛を持っていて、そして羽根が生えている生物ってなんだ？

……なんかドラゴンみたいだな…
マンガで見るような感じ、としか言えない。
しかし、俺の常識は語る。

「ドラゴンなんているはずねぇよな…」
…けど、ならコイツはなんなんだ。

…こういう意味のわからない場合は立ち去るのが一番だ。
うん、そうしよう。
…と言うわけで、

「よいしょっと」
と立ち上がるものの、ここがどこだか、俺には検討もつかない。
てか、俺、なんでこんなとこにいるわけ？
今更ながら、俺はこんなことを考えていた。

「まぁ、適当に動き回ってみるか…」
なんでこんなとこにいるかは、後で考えるぶきだろう。まずは人を探してみるべきだ。夜になって一人、山の中。
怖ぇよ！！

適当で度胸のない俺だった。

「ぴゃあー！」
そう考えながら歩き始めると、この変な生物もついてきた。
「しっ、しっ。こっち来んな！」
俺は手でジェスチャーをして見せた。
「ぴゅう？」

絶対にわかってないな。まぁ、当たり前か。
さて、まずはコイツを引き離しておくか。
いきなり襲い掛かってきたら、と思うと怖くてたまらない。

「ぶごぉぉぉぉ」

俺の約三十メートル前方に、これまた変なのが現れた。
「またかよ…」
今度のは、身長は一メートルほどの二足歩行だが、相撲取りよりも太い身体。そして、それが全部筋肉でできているのではないかと思わせる身体つき。
いわゆるゴブリンと言われている奴ではないか？

…意味が分からん…
ゴブリンなんか空想の生き物だろ！？
…それなら、まさか、コイツは本物のドラゴンなのか？
「ぴゅう？」
「そんな訳無いか…」
俺はこんな時にも悠長に考えていた。

しかしそのゴブリンらしき生物をもう一度見直して、ようやく自分がどれだけ危ないのかが分かった。

そいつの右手にはまるで太い丸太のような物を持っていた。
…絶対俺を敵視しているな。
俺をおもいっきり見ているし…
「ぶごぉぉぉぉ！」
そいつはそう叫びながら俺に襲い掛かってきた。
ヤバッ！こっちに走ってきやがった。
「クソッ！俺が何をしたんだよ！」
涙目になりながら全力疾走する俺であった。

「はぁ、はぁ、はぁ」
どうにか撒けたようだ。「ぴゃあぁ！」
「なっ！」
コイツ…俺の背中にくっついていやがった。あまりに本気で走っていたから気付かなかった…
そして、ようやく息が整ってきた頃にどこからか音が聞こえた。
ばしゃゃゃゃ。
滝らしき音だった。
「水…水」
先ほどの逃走で、すでに俺の喉は渇ききっている。水に飢えてた

俺は一目散に音の鳴るほうへと進み始めた。

滝には、すぐに着いた。
そこは底が透けて見えるほどの綺麗な湖だった。　俺はいの一番に水をのんだ。
ふぅー。生き返る。
…なんか身体が暑いな。

水を飲み終えた俺は何故か身体が火照ってたまらなかった。それは走ったから暑い、というわけではなく、身体の内側からどんどん熱が生まれてきているようだった。

まさか、この水、もしかして飲んだらやばいものだったのか！？

そう思っていたら、身体の熱は消えていった。

本当はこのことについてもっと考えるべきだったのかもしれないが、顔を上げた俺はさらなる衝撃を受け、そんな余裕は消えた。

…色々と良い意味でだが…

目の前には裸で水浴びをしている女がいた。顔は反対方向を向いていたため、わからないが、肌の色はとても白く、身体の締まり具合から若いことは確かだろう。

「ぴゃあぁぁぁ！」
「えっ！！！」

「あっ！」

水浴びをしている女もその鳴き声に反応してこっちに振り返った。美少女でした。

それも浮世離れしていると思わせるほどのレベルだ。身長は百六十センチとちょっとだろう。身体は締まってはいる。ついでに胸も締まってた。髪は水色のロングストレートだ。

…水色？似合っているのは確かだが、そんな色に染めるか？普通…

……ヤバッ。

目が合ってしまった…

どうする？どうするよ、俺？

落ち着け俺。

今、この場面、選択肢は三つだ。

一、すぐさま謝る。

二、逃げる。

三、襲う。

いや待て、待て、待て！！

三はどう考えてもないだろう。俺の欲望が丸だ……いや、なんでもない。

なら二か？…いやダメだ。俺はここがどこかもわからない。さらに先程のゴブリン似のおかしな生物もいるんだ…

うん、一だ。それしか無いな。

以上、一秒。

そして、俺は素早く、深く頭を下げて言った。
「ありがとうございます！ご馳走様でした！」
…あれ？これ謝罪じゃなくて、お礼を言ってね？
その瞬間、彼女は猛烈な速さで顔を真っ赤にして、こっちに来た。
そして、俺の目の前に来ると、
「えっ？」

バッチン！！！

盛大なビンタを食らわされた。俺の今までの人生で一、二を争うほどの強烈な痛みだった。
おまけに女からのビンタは初めてだった。…

それにしても痛い…だって『バチン！』じゃなくて『バッチン！！！』だぜ。激しすぎだろ！

…まぁ、ビンタを食らうのは当たり前、と言う行為をしたのだから仕方ないのだが…

「グぅぅぅ。ガァ！」

いきなり俺にくっついていたドラゴンっぽいのが、吠えた。まるで相手を威嚇するかのように敵意を丸出しにして。
だが、このことについては、彼女の方が俺以上に驚いていた。けど、彼女が驚いていたのは、吠えたことに対して、ではなく、まるでこの生物の存在に対してであったように見えた。

先程は俺のことだけしか見えなかったのだろう。

「う、うそっ。なんでこんなところに、ドラゴンが…」

……今、なんて言った？え？ドラゴン？ドラゴンって言ったか？おいおい、嘘だろ…

いや、待て、落ち着け。今やるべきなのは謝ることだ。彼女が驚いて固まっている内にしなければならない。コイツのことを考えるのはその後だ。

「すみませんでした！あの、俺、ここどこだかわかんなくて…変な生き物には襲われるし。で、逃げたのはいいけど、水がたまらなく欲しくて…本当にすみませんでした！」

「……」

「……」

「……ちょっとそこで待ってて」

「え、あっ、はい」

そう言って彼女は岩場のほうへと向かった。服を着に行ったのだろう。

ところで俺は許してもらえたのだろうか？

てか、さっきは焦って考えてなかったけど、声も透き通るような綺麗だったなぁ。…じゃなくて日本語話してたよな。てことは、ここは日本ということだろ。よかったー。

待つこと五分。

その間に俺は、これからのことを考がえた。
結論。
一人で考えてもなんにもわかんね。もう考えるのやーめた！
…俺は本当に頑張って、考えたんだぞ！

ようやく彼女は着替えを終え、こちらにやって来たのだが、その服装は俺の予想の遥か上をいった。
「キレイ…」
ぼそりと口から言葉が出てしまった。
だけど、そこまで綺麗だった。もともと美しい顔立ち。それに加えこの服装。まるで森の妖精を想像されられる様な少し薄め青い服。
なんと言うか俺の知ってるゲームやマンガのエルフみたいな服だな。
そして、その彼女は俺のもとに来ると、片手を振り上げた。
…まさか？
バッチン！！！
本日二度目の盛大なビンタだった。

なんでだ…
俺がバランスを崩して倒れそうになった時だ。彼女は俺の胸ぐらを掴んで支えて……くれたわけではなかった。
彼女は俺を倒さない様にして、右へ左へと合計二十発以上のビンタを俺に食らわしてくれやがった。

俺が意味が分からないと言いたげな顔をしていると、彼女は言った。

「私の手が痛くなったからこれで許してあげるわ。…まさか、一発で許してもらえたと思ってたの？」

痛ぇ。泣きてぇよ。このクソ女が！

俺は盛大に腫れ上がった頬を撫でながら、彼女にばれない様に心の中で言ってやった。

…俺って小心者だね……

「何か？」

「いえ、なんでもありません」

彼女は「ギロリ」と効果音が聞こえそうな鋭い目付きで睨んできた。

この女エスパーか？マジ怖ぇ。

「じゃ、まずは自己紹介ね。私はリリー。リリー・フーリン。リリーでいいわよ。あなたはの名前は？」

…外国人？ま、いっか。日本語話してくれるし。

「俺の名前は……」

「……」

「……」

「…どうしたの？」

えっ、ちょっと待ってくれよ！

考えろ！考えろ！俺！

……ダメだ…

「ハハハッ、ハハハハハハ」

「ち、ちょっと！本当にどうしたのよ？」

俺は半ば自暴自棄になり、意味もなく笑っていた。

「分からないんだよ！」

「……え？なにが？」

リリーは首をかしげて聞いてきた。

「俺の名前」

「……え？」

〈02〉聖剣探し

「…ごめんなさい。もう一回だけ言ってもらえない？」

リリーが顔を引きつらせながら俺に聞いてきた。

「えっと…名前を忘れたっぽい…」

いや、いや、これは冗談抜きだから。俺だってこんなどこだかわかんない場所でそんなボケかます余裕なんてあるか！

真面目なところ、どうしよう？

「…本気で言ってるの？」「…はい」

「……」

「……」

…気まずい。

隣では先ほどのドラゴン？っぽいのがリリーの着替えに待ちくたびれたらしく気持ち良さそうに寝ている。

くそっ！いい気なもんだな！！

「…他に思い出せないことはある？」

リリーに聞かれて、色々と考えていくと…

「…そういえば、なんで俺はこんなところにいるんだろう？」

「……」

「……」

「……わかったわ」

リリーが呆れたように言う。周りの風と水の音しか聞こえないほどの静けさが余計に二人を気まずくさせる。

「それであなたは――」

リリーが何かを言いかけて止める。

「あなたって言うのもなんだかね。あなたの名前とか呼び方どうするの？」

それもそうだな。いつまでも名前が泣ければ不便だしな。

「じゃあ、リリーがつけてよ」

「えっ！何で私が？？」

そんな事は決まっている。

「俺にはネーミングセンスがない！！！」

俺は、はっきりと言ってやった。むしろ照れて言うほうが恥ずかしいと思ったからなのだが…リリーは「ぽかーん」と言う効果音が相応しいような惚けた顔をしていた。

そして…

「あはははははっ！！」

いきなり笑いだした。それも涙目になるくらい盛大に。

……そんなに笑うことねぇだろ！？

「あなた本当に面白いね。いいわ。私があなたの名前を付けてあげる」

名前を付けてくれるのはありがたいが、何故だろ？釈然としない。

「そうね……デルティネなんてどう？愛称はデルでね！」

「俺は日本人なんだけど…」

この後、俺はリリーから思いもよらない質問を受けた。

「？日本ってどこ？もしかしてまだ私達の知らない土地？」

…えっ、日本を知らないだと！現代で日本を知らない人がいるのだろうか！？

いや、そもそもリリーは日本語を話している。日本語を話していて、日本という国を知らない？？

一体全体どういうことなんだ？…なら…

「なら、ここはどこなんだ？」

「ここはムー大陸の西にあるクルル森」

…は？えっ、ムー大陸？？

ムー大陸って大昔に消えたって言う大陸のことか？ありえない。

それが作り話じゃないにしても現代には絶っっっ対にムー大陸なん

てない。

俺をからかっているのか！？

そう怒鳴ってやろうとしたが、その前に俺の思考はまた働く。

待てよ、常識で考えたならムー大陸なんてないけど、俺がここで見たゴブリン？やドラゴン？は確実に常識外だ！

日本国外にしてもおかしい。

「あ、あの、嘘じゃないですよね？」

弱気になっているな俺……いや、こんな場面で強気でいられるほうがどうかしている。

「嘘じゃないわよ。ここはムー大陸のクルル森」

諦めよう。もうなんでもいいや。なるようになれ！

考えても無駄だ。流れに身を任すしかない。

俺はもう「何故」、「どうして」よりも「これから」の事を考えることにした。

「…デルティネだね？わかった。改めてよろしく！リ、リリー！」

そう言って、俺は右手を差出し握手を求めると、リリーも握りか

えしてくれた。
「こちらこそよろしくね！デル」
リリーは何故か分からないが顔がほのかに赤みを帯びていたように見えた。
握手自体は特に戸惑う事なく自然な流れでしてくれた。
…他に理由は無さそうだし、やっぱり気のせいか。
それにしても…
くそぅ！やっぱりかわいいな！
初めこそ気まずくなるかな？と思っていたが、中々良い雰囲気でいられそうだ！
いや、こんなにも可愛い人がいるんだ。良い雰囲気を作らないともったいなさすぎる。
俺は先程の慌てたり、驚いたりしていたのが嘘のように下心丸出しだった。
仕方ないだろ？健全な男なんだから。
「それで日本ってどこなの？」
「あー、それは俺が勘違いしてたみたいなんだ。すまん！」
説明しきる自信がないので、俺はごまかすことにした。…仕方ないだろ！現状すらわかってないのに…
「むぅ」
リリーは納得こそしてはいなさそうだが、ありがたいことに追及はしてこなかった。

てか、その反応可愛すぎる。

「それで、リリーはここでなにをしてたの？」

俺は何気なく聞いたのだが…

ピキィ。

やばっ！

リリー顔が怖い笑顔に変わった。

俺は言った後に地雷を踏んでしまったと感じた。まぁ、そうだろう。さっき裸を見られたのだから。

…またビンタかな？

もう嫌…

ちなみに出会った時に受けたビンタで頬は、腫れてはないものの、まだヒリヒリする。

「…これから聖剣を取りに行こうとしてたの」

ビンタを覚悟してたが、予想外に普通に話してくれた。内容は別だけど…

「…ビンタは？」

「デル、あなたは私をどういう風に見ているの？」

「リ、リリーさん？顔が引きつっていますよ？」

バっっっチン！！！

不用意な発言は控えよう…痛いから…

「話に戻るわよ！」
「…はい」

「でね、その聖剣ってのは適合者以外呼びつけないらしいの。それで意味は無いだろうけど、一応身を清めようと水浴びをしてたの。あそこの湖はキレイだから」
「なるほど…そこに丁度俺が来たってことだな！」

ピキィ。

また言ってしまった…
リリーさん、また顔が引きつっていますよ。

「あの、俺、道わかんないからついていっても良いかな？」

相手の顔色を伺うような話し方になった。
てか、リリーに付いていかないとなんにもできないし…

「いいわよ。はじめからそのつもりだしね。聖剣探しが終わったら街まで連れて行ってあげるわよ」

「ありがとう！！」

俺はリリーの両手を掴んでお礼を言った。さっきの握手といい、リリーの顔が赤く見えたのは気のせいだろうか？

「じ、じゃ、早く行きましょう」

そう言って、リリーは後ろに振り返り、何故か早歩きで歩き始めた。俺も彼女後ろについて歩き始めた。

「わかった。…けど、どこへ行くの？」

「ああ、行ってなかったわね。聖剣は適合者だけを呼びつけるのだけど、その呼びつけ方は頭に直接話しかけてくるのよ。要するに念話だね。だからこの辺りをずっと歩き回るの」

マジか…

てか、念話とか言われてもわかんねーし…

「あのー、念話ってなんですか？」

リリーは驚い…いや、呆れている様だった。だって、日本にはそんなものねーし、仕方ない。

「念話って言うのは、さっきも言ったけど直接頭に話しかけてくることなの。まぁ、人類のほとんどはそんなことできないし、できるのも一握りの上位種か勇者クラスの人類くらいね。」

…上位種？勇者クラス？

意味が分かりません…

「もしかして、まだわからないことがあるの？」

リリーがそう聞いてきてた。…ぶっちゃけ、ほとんどわからねぇ…

「俺は異世界から来ました」

なんて言えないし、どうすればリリーに怪しまれずにこの世界のことを教えてもらえるかな？うまくごまかしながら言える自信がねぇ…

「…デル、あなた、もしかして…」

ヤバイ！絶対怪しまれてる。どうしよう？

「い、いや、えっと…」

「あなた、もしかして異世界から来たの？」

……え？

「な、なんでそう思うんだ？」

リリーは妖艶な笑みを浮かべて言った。

「だってあなたこの世界の人にしては、常識を知らなすぎるし、日本人とか言うよく分からない人種のことを言うから…それに、たまにいるらしいのよね。異世界から来る人」

…マジか…？俺以外にも同じ世界から来た人がいるのか！？　何か希望が見えた気がする。

「そ、そうなんだ。お、俺はリリー達にとっての異世界から来た…はず……たぶん…」

いざ明言しようとすると、どうしてだろう……自信が無くなる。

俺って本当に異世界から来たんだよな？

いつのまにか自問していた俺であった…

そしてリリーは俺が異世界から来たことを告げると目を大きく見開いていた。とても驚いている様だった。

「…ほ、本当に？」
「はい。本当です」
「……」
「……」

またしても暫しの沈黙が流れた。
てか、リリー自身が異世界から来た人はいるって言ってたのに何でそんな驚いてんだよ！？

「…本当にいるのね……わかったわ。確か冒険者ギルドのマスターが昔いた異世界の人の書き残した書物があるって言ってたから、街に着いたら見してもらいましょう！」

「…冒険者ギルド？」

「そういうことは全部街に着いてから私が教えるわ」「わ、わかった」

何故か「私が」が強調されていた気がする…気のせいだろうか？

「なぁ、リリー」
「なに？」
「さっき、たまに異世界から来た人がいる、とか言ったよな？」
「…言ったわよ」

「じゃあ何で『本当にいるのね』なんて言ってんだよ！！！？」
俺は突っ込みとしては、ありえないくらいの大声で言ってやった。
「そんなの軽くからかっただけよ」
「なっ！」
リリーは特に気にしている様子もなく言った。本当にからかっただけなのだろう。
対して俺の顔は酷く赤くなっている。怒りと恥ずかしさが三対七くらいの比率で。
「デルが赤くなってる。かわいー！」
「ぐっ！」

さらに赤くなる俺であった。
明らかにからかかっているのが分かるが、どうしても反応してしまう。
全部リリーが、か、可愛いから悪い。
「あれ、また赤くなってるの？」
頭で考えているだけなのだが恥ずかしくなってしまった。
「もういい！！」
俺がそう言うと、リリーは笑いながら言ってきた。
「そう。なら、まずは聖剣を探しましょう！……その前にそのドラゴンはどうしたの？」

「ぴゃあ？」

そうだ。衝撃的な話ばかりで忘れていたが、コイツがいたんだ…
てか、いつ起きた？

「いや、正直、俺にもよくわからないんだ。何故か付いてくるんだよね」
「…その子の親は？」
「知らないけど…」
「……やばいわね」
「え、なんで？」
「ドラゴンってのは親子の絆がとても強いの。だから、下手に子を傷つけたり、攫ったりすると、親が報復しにくるわ。…それも、街一つ壊滅させるほどの勢いで…」

どうしよう？
ということは今の俺は非常に危険ということだよな？
…どうしよう？？？

「ねぇ、リリー、俺はどうすればいいの？」

俺は激しく取り乱してリリーに尋ねた。

「…一概には言えないけど、もし、その子が親が死んでここまでさまよっていたのならそのまま連れていけば良いんだけど…それ以外だったらダメね」

ダメってなに？俺、死んじゃうの？

「まぁ、その子の好きにさせなさい」
「…それで、もし親が来たら？」
「……」

リリーは何も言わない。
「え、リリー？…ちょっとなにか言ってよ！」
「…頑張って…」
いやだー！
…完全に死亡フラグ成立しちゃった……

「まぁ、元気出して！その事も含めてギルドマスターに聞いたら大丈夫よ」
「…絶対？」
「……」

やっぱりダメじゃん！！

「ま、まあ聖剣探しに行きましょう？」
「その前に早く街に連れていってくれよ！」

つい声を張り上げてしまった。

「ごめんなさい。それは無理なの。ここに来る時は知り合いに頼んでワイバーンで来たの。でね、その知り合いにはあと、三時間後に来るようにたのんでいるから」

ワイバーン？飛行竜みたいなものかな？

「謝らないくていいよ！そういう事情ならしかたないし、無茶言ってるのは俺の方だしさ」

今更ながら怒鳴った自分を怒りたくなった。

「そう言ってもらえると、助かるわ。…あなたはここで待っていてくれてもいいのよ。この辺りはほとんど魔物には出会わないしね」

その低確率が当たったんですけど…

やっぱりあのゴブリンっぽいのは魔物なんだな。

「…はぁ…わかったよ！どうせ他に選択肢はないんだろ！行くよ！」

「ぴゃあぁ！」

この先大丈夫か、俺？

歩くこと三十分。

俺は、汗ダラダラ。おまけに途中から歩いていたシャルも俺の背中にくっついているし…あぢぃ。

シャルとは、先ほどリリーから『このドラゴンの子の名前はどうする？』と聞かれたので俺が名付けた。

名前のセンスはわからないが、シャルはこの名前を気に入ってくれたようだからよしとしよう。

リリーは俺と比べると少ししか汗をかいていない。息もほとんど乱れていない。
まぁほとんど乱れていないと言ってもやはり少しは乱れているわけで、それがむしろエロい。ほんのりと掻いている汗がリリーの身体と服を密着することによって、身体のラインがくっきりと出ている。

「デル。今、どこを見てた？」
リリーはほのかに怒っているような口調だった。
「えっ！？べ、別に何も…」
リリーが「嘘ね」とでも言いたそうな顔で俺をジト目で見てきた。
……本当はバッチリ見てました。特に腰やお尻を。体つきがスマートな女性って良いな！！！

そんな下心全開の思考に入っている時にリリーは――
「…胸はまだ、発展中なんだから……」
何かを言ったようなのだが、上手く聞こえない。
「何て言ったの？」
「うるさい、うるさい、うるさい、うるさーい！」
またしても地雷をふんだようだ…

歩き始めてから三十分間。俺はこの三十分でいろいろとリリーに質問をした。
俺の頭で簡単にまとめるとこの世界は神あり、勇者あり、魔王あり、悪魔ありのなんでもありな、まるでゲームのような世界だと思ってもいいようだ。
それに加えて魔術、錬金術、陰陽術などの人が使う馬鹿げた力もあるとのことだ。
本当にゲームだな！！
と叫びたかった。

ちなみに俺が元の世界に戻る方法は冒険者ギルドのマスターに聞いてみないとわからないらしい。
と言うことがわかった。 他にもいろいろと話した。それは単なる友達同士の会話みたいなものなのだった。ようやく一息つけたけど…何度からかわれた事か……

「止まって！」
俺が今までの会話の内容を頭の中でまとめていると、リリーが鋭い声で言った。

「？どうしたんだ？」
「……」
「……？」

何事かと思いリリーにもう一度尋ねようとした時、リリーがいきなり後ろに振り返えり、右手を前に出して

『風切りの刃』

そう静かに、しかし重い声で、そう言うとともにリリーの右手から鋭い風が生まれ、気がつくと空気を裂けてた。音速の域に入っているのだろう。

実際、その風は眼ではほとんど見えないけれど、空気の歪みみたいなものは、ハッキリと見えた。

これが、さっき言ってた魔術なのだろう。そして、その風が切り裂いたものは…ただの花？

なにをしているのか尋ねようとすると、今リリーによって切り裂かれた花が、俺を襲ってきたゴブリンらしき生物に、いきなり変化した。

「ど、どうなってるんだ…？」

「あれは『オーガ』と言う食人鬼よ。変身能力を持っているけれど、レベル的には下級ね。安心していいわ」

…へぇ…下級ね。

「いや、いや、いや、食人鬼でしょ！『食人』とか、ヤバいじゃん！食われるよ！」

「大丈夫よ。アレは下級の雑魚だから」

ダメだ。思考回路が俺と全く違う。男の俺より断然たくましい。

「ガァーーー」

やべぇよ。アイツめっちゃ怒ってるよ。食われちまうよ！

「はぁ、うるさいな」
不機嫌そうに言うリリー。そこには今までの楽しげな雰囲気は無くなっていた。
「せっかく楽しくしていたのに」
リリーは何かをぼそぼそと言って、こう続けた。
「デルはここで待ってて。すぐに終わらせるから」
そう言うと俺の返事も待たずにリリーは数歩前に出た。
リリーさんマジたくましいっす！
「風よ。我が太刀となり。盾となり。力となりて全てを断ち切れ！」
リリーが呪文と思われる言葉を発する毎に彼女の頭上に風が集まり、半径三メートルはあろう球状に凝縮されていく。
『かまいたち』
次に彼女が魔法名らしき言葉を発すると彼女の周りに集まっていた風が消えた。
不発なのか！？
しかし、その一瞬をオーガは見逃さなかった。
「ウゴォォォォ！」
オーガは叫びながら突進してきた。
俺はリリーの手を引いて逃げようと彼女の横に行くと……リリー

は笑っていた。
次の瞬間、どからともなく先程リリーの頭上にあった球状に凝縮した風が一瞬にしてオーガの全身を包み込んだ。
「ごがぁぁぁぁぁぁ」
オーガを包み込んでいた風全てがオーガを引き裂いた。全方位から数えきれないほどの風の刃が眼にも止まらぬ速さで引き裂いく。
「すげぇ…」
俺はと言うと、ただぼけっと眺めることしかできずにいた。
そしてオーガが動かなくなり、倒れた。
死んだのかな、と思った直後、急にオーガの身体が灰のようになって崩れていった。
「下級の魔物は基本的に死ぬと灰になってしまうのよ」
ありがたいことに俺が質問しようとしていたことをリリーが先回りして答えてくれた。
そうか、灰になるのか…もしこれが人と同じように血を流して、悲しそうに唸りながら死んでいたらトラウマになっていたことだろう。
『…こ……て…の…じ』
微かにだが、何かが聞こえた。だが、どこから声が発せられているのかがわからない…
「デル、どうしたの？」

リリーは俺の様子がおかしいと思って俺に問いかけてきた。

もう一度、その声は聞こえた。今度はハッキリと聞こえた。

『こっちにきて、我が主』

〈03〉聖剣へスペリデス

聞こえた。確かに『こっちにきて、我が主』と誰かが言っていた。だが、いったい誰が？どこから？と思った瞬間にリリーの言葉を思い出した。彼女が言うには『聖剣は適合者を呼びつける』『念話って言うのは、直後頭に話しかけてくる』らしい。

なら、今のは聖剣が俺を呼んだのか？

「ねえ、ねえ！デル！」

「えっ！？」

考えに集中しすぎて気付かなかったが、リリーが呼んでいたようだ。

「ねえ、どうしたの？」

…ここは言うべきだろう。俺一人で考えてもどうにもならない。

「『こっちにきて、我が主』って言われた…」

「『主』？……言われたって、誰に？」

「……せ、聖剣？」

「…えっ！？どういうこと？詳しく話して！」

彼女の表情が変わった。俺に話し掛けてきた時は、俺を心配していた表情だったが俺が『聖剣』と言ったとたんに、その表情は一瞬だけ驚いて、すぐに厳しいものへと変わり、俺の胸ぐらを掴んできた。

「えっと、リリーがオーガを倒した後に、なんか、いきなり、どこからともなく、声が、聞こえたんだ…てか、苦しい……」

「……」

「……」
リリーは厳しい表情のまま真剣に考えていた。対して俺は、そんな彼女から言葉が発せられるまで、ただ待つだけだった。…それより俺の胸ぐらを掴んでいる手を離してほしい。

ようやくリリーが手を離してくれた。
「悔しいけど、それは聖剣の呼び掛けで間違いないでしょう。この辺りには、念話ができる上位種はいないでしょうし」

ちなみに『上位種』とは、その名の通り優れた魔物らしい。また、『ドラゴン』の成体は上位種のさらに上の『亜神』と呼ばれているらしい。これも、ここまでの移動中にリリーが教えてくれた。

「どこに呼ばれたのかわかる？」
と、リリーが聞いてきた。俺は声がどこから聞こえているのかは分からないが、何故かどこに呼ばれたかは分かっていた。…場所の指定なんかされていなかったのに、何故だろう…？

「あっちから」
俺は右手で北の方向を指差した。
「ここからの距離はわかる？」
「たぶん五百メートルくらいだと思う」

何故だろう。これもわかる。念話と言うものはこんなものなのだろうか？…リリーも驚いている気配を見せないし…

「わかったわ。なら、急いで行きましょう！」
「いいけど、急ぐ必要ある？」
別に急ぐ必要は無いのではないか？待ち合わせの時間まではまだ

二時間以上ある。

「今日のこの森は何か変なの。…普通、オーガなんてこの辺りには生息していないの。もしかしたら聖剣がデルを呼んでいる影響かもしれない…」

「聖剣と俺がどう影響するの？」

「これは、たぶんの話しだから、そのつもりで聞いてね。私が思うに、聖剣と適合者であるかもしれないあなたが、いることで聖剣から人類にはわからない様な何か特別なものが流れているのでしょう」

「特別なもの？」

「ええ、たぶんね。…私には四分の一エルフの血が流れているから普通の人では感じ取れない事がわかるの」

おー！マジか！？うん、リリーの顔立ちやスタイルを見ると納得できるな。エルフって格別に美しいって相場が決まってる。にしても、

「エルフかー、すげっ！」

「あなたも人のこと言えないわよ。その白髪に碧い眼。普通の人では、そんな人いないわ。」

……え？白髪？碧い眼？俺は髪も眼も黒なのだが…どういうことだ？

「…リリー、鏡持ってない？持ってたら貸して！」

「？いいけど…」

リリーは、その薄い服から小さな鏡を取り出して、俺に渡してくれた。

よくしまっておけれたな。と思ったが、一刻も早く自分の顔が見

たいので言わないことにした。

「……」

そこに映っていたのは白髪に碧い眼の俺だった。

「……本当だ」

「何を疑ってるのか、知らないけど早く行きましょう！」

…他にも変わったことがないか確認したが、百七十ほどの身長や中肉中背の体つきなど他は変わってはいなかった。

「…わ、わかった。行こう…」

あー、もう、どうにでもなれ！慣れるしかないんだろ、この世界に！やってやる！絶対に元の世界に帰ってやる。

俺はそう決意して、聖剣のもとへ走りだした。

「ここに聖剣が…」

着いた場所は、大きな洞窟だった。入り口は縦横それぞれ十メートルはくだらないだろう。それよりよく今まで気付かれなかったよな。やっぱり聖剣の力のせいか？

「じゃあ、行くわよ！」

「ねぇ、その前に一つ聞いてもいい？」

「…手短にね」

「なんで今までこの聖剣は見つからなかったの？」

「いい！？聖剣ってのは持ち主を選ぶの！だから適合者以外は誰に

も発見できない。それに今までに見つかった聖剣は世界に七本しかないらしいのよ！それくらい発見が難しいってこと。…この森に聖剣があるって情報が流れたのも奇跡くらいなの。まぁ、ほとんどの人はデマだと思うし、実際、私もデマだと思ってたけど…」

「ふーん。なるほど」

いやー、納得、納得。

「もういい？」

「オッケー！いいよ！」

「なら、行きましょう」

「おう！」

洞窟の中に入って、数分。何事もなく、ただ真っ直ぐ前に進むだけで、ある部屋に出た。そこは東京ドーム並みに広い空間だった。その中央に西洋の大剣のような、長さは一メートルを越えているかもしれない剣が地面に刺さっていた。

「リリー、これが聖剣？」「ええ、そうよ！魔力の流れが尋常じゃないわ！」

そうっすか！？魔力の流れとか言われても俺にはさっぱりわかんねーし。

てか、ここまで簡単すぎないか？普通、超絶レアアイテムの付近にはとてつもなく強い魔物とかがいるはずたろ！？やっぱりゲームとリアルは違うか…

「デル、早く剣を抜いてみて！」

「俺が抜いていいの？」
「当たり前でしょ。適合者はあなた、私が触ったところで何にもならないわ」
「わ、わかった」
俺は聖剣のもとへと行った。そこには、魔力の流れなんて全くわからない俺でも魔力があると思うほどに他と空気が違った。
あぁ、こんなのが魔力なのかな。そう思った。

そして、俺が剣の柄を握った瞬間、俺の頭に声が響いてきた。念話だろう。
『汝、我との契約を求む者か？』

「…ああ」

『よかろう。我は汝に力を貸し与えよう。その対価として汝は我を愛せ』

「ああ、わかっ……は？」「どうしたの、デル？」
俺の気の抜けた声にリリーが反応した。
「大丈夫だ」

『契約を拒むのか？』

再び聖剣が話しかけてきた。
「…いや、契約しよう」

『ならば我が名を呼びながら我を地面より抜け』

何故だろう。何故かこの聖剣の名前がわかる。これが契約したってことか？

そして、俺は手に力をいれ、大きく息を吸い込み、

「ヘスペリデス！」

言うのと同時に剣が抜けた。しかし、直後に剣が俺の手から離れ、剣から煙の様なものが出てきた。剣がどこにあるかも分からないほど濃かったが、次第にその霧のようなものは消え……あー、ちょっと待ってくれ。眼にゴミが入ったのかな？

ごしごしごし。

…見間違いではなかった。聖剣ヘスペリデスは……女に変化した！

眼は茶色。髪は茶色だが、ほんの少し赤色が入っているのだろう。顔つきから判断するに俺とたいした年齢差はなさそうなのだが…胸は巨乳と言うほどではないが確実にリリーよりもデカい。

服は、またリリーと同じくらい薄い布を首から紐のようなもので垂らしており、足元まであるが、ノースリーブのように肩から先はなく、そこから出てきた手はとてもきれいだった。

「お初にお目にかかります。私の剣名はヘスペリデス。真名はエリュテイスと言います。エリーとお呼びください。そして、これからよろしくお願いします。主様」

にっこりと笑って、そう言った。かわいいのだが……後ろからものすごい殺気を感じる。主にリリーのところから。

リリーさん、怖いですよ。

「俺の名はデルティネ。こちらこそよろしく。それと、敬語はいいよ。あと、俺のことはデルって読んでくれないか。主様なんて呼ば

れると落ち着かないからさ」
俺がそう言って返事をすると、
「はい。わかりました。それでは契約通り、私を愛してくださいね。デル様」
ピキィ
リ、リリーさん？もしかして怒っていらっしゃる？血管浮き出てますよ。
「デル、さっきの契約ってどういうこと？」
リリーが尋ねた。まぁ、普通に考えて疑問になるよな。
「えっと、」
「言葉の通りです。デル様が私を愛してくれるのです。ね、デル様」
俺が言おうとしたら、俺の言葉を遮ってエリーが答えた。てか、エリーの口調が念話の時と違って女の子の口調になっている。……いや、まぁ、かわいいんだけど…
「私はデルに聞いたのだけど？」
「あなたごときがデル様とお話しになるなんて身の程をわきまえたらどなんですか？貧相な胸の人」
リリーを馬鹿にしたような発言をして、あろうことかエリーは俺の腕に抱きついてきた。
「ち、ちょっと、エ、エリー！？」
「なんですか？私を愛してくれるのでしょう？」

「そうは言っても…」
「！…へ、へぇ、デル。そんなこと言ったんだ。」
だから、リリーさん、怖いって。

「フフフ」
「フフフ」
二人の美少女が互いににらみ合い、この洞窟の中が殺気でいっぱいになるくらいの量の殺気が二人から流れ出ていた。

だから、リリーさん、怖いって。

「フフフ」
「フフフ」
二人の美少女が互いににらみ合い、この洞窟の中が殺気でいっぱいになるくらいの量の殺気が二人から流れ出ていた。

…これ、やばくない？俺、生きてここからでれるのかな？

「ぐぅぅぅぅ、ガァ！」
エリーが俺の腕に抱きつく直前に俺の背中から降りたシャルがいきなり吠えだした。
「どうした？シャル？」

その時だった。

ガゴン！！

大地が揺れた。地震か？と一瞬思ったが、違った。　揺れが納まると、地面から人の形をした何かが出てきた。
だが、あれは絶対に人じゃない！俺の直感がそう告げている。そして俺の本能は逃げろと言っている。
揺れの原因はコイツだ。

『封印を解いてくれたことには感謝するぞ、小僧』

これも念話か！？エリーの時と全く違う。コイツの念はとてつもなく気持ち悪い。まるで、憎悪の塊みたいだ。吐きそう…

『早速だが、貴様ら…死に絶えろ』

そう言って、ヤツは俺たちに襲い掛かってきた。

〈04〉それぞれの考え

俺の名前はデルティネ。と、さっき名付けられた。

俺は、今日まで至って普通の日本人だった。それが今日、いきなり異世界らしき場所に来た。名前がわからない。どうしてこんな場所にいるかもわからない。それなに…

目の前にはドラゴンだけがいた。意味がわからない、ふざけんな！とも内心思った。思わない奴のほうが、どうかしている。

だけどその後すぐに目の前に美少女に会った。それだけの理由で俺は無理矢理に平然を保った。十六歳の思春期と言うのはそういうもので、かわいい子には格好よく見せたいのだ。それに彼女と一緒にいると自分でも不思議に思うくらい落ち着けた。

出会いかたは最悪…俺にとっては最高かもしれないが、こんな異世界で初めて会ったのが彼女で心から良かったと思えた。

彼女は俺に名前をくれた。俺が異世界から来た人だとわかると、いろいろ教えてくれた。街まで連れていってくれると言った。…いきなり裸を覗いた奴に何故ここまでしてくれるのか、疑問に思うぐらいに彼女は優しかった。

そして、ひょんなことに聖剣と契約した。その聖剣との契約はおかしなものだった。内容は俺に力を貸し与えてくれる代わりにその聖剣を愛すること。剣を愛すのか？と疑問に思ったが、よくマンガで愛刀なんとか、ってのを見た。だからこれもそんな感じかなと思いきや、その聖剣が美少女に変わった。…かわいかった。口調がいきなり変わったことにも驚いた。…最初に会った女の子が怒っていたのは不思議だった。彼女は一度もできたことはないし、女子と会話することさえほとんど無かったのだから。

だけど、そこまでは良かった。いや、良くはないけど、この後に出てきたヤツとは天地の差だ。

いきなり地面から出てきた人型をしたヤツは、とにかく気持ち悪

かった。何が気持ち悪いかは口では言えないが、とにかく気持ちが悪い。ヤツはヤバイ。逃げないと死んでしまう、と本能が告げていた。日本にいては、絶対に味わえない恐怖だった。近くにいた二人も同じ様だった。唯一ドラゴンだけは違った。闘志があった。

けど、、

死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。

それ以外の俺の考えはすぐに消えた。

それほどまでにヤツはヤバい！

そう思っていると、逃げる間もなく、ヤツは襲い掛かってきた。

私の名前はリリー・フーリン。エルフの血が四分の一流れているクォーターで、こう見えても中々に上級の魔術師だ。

聖剣がとある森にあるという噂があったので、行ってみることにした。周りはガセネタと言っていた。私もそい思ったが、たまたま暇だったので、ちょうど良い暇潰しぐらいになるかも、と思ってここに来た。

この森には、聖水まではいかないが、中々に清めの効果を持つ湖がある。

そこで彼と会った。

彼との出会いは最悪だった。ちょうど身体を清めている最中に会ったのだ。と言うことは、裸だ。裸を他人に見せるのは初めてだ。友達にもない。家族でも、私が五歳の時までしか見せてない。それは、私の祖母、つまりは純血のエルフの教えである。なんでもエルフは自分が認めた相手以外には肌を触らすことさえさせないらしい。

私もその教えを受けた。
だから彼に裸を見られた時には内心激しく動揺した。…恥ずかしかったのだ。顔も真っ赤だったかもしれない。魔法を使って撃退すればよかったのだろうが、そんなことは動揺していて頭に無かった。また、正直、彼に見惚れていた。白い髪に碧色の眼。とても綺麗だった。
そして、彼はあろうことか私にお礼を言ってきた。そこで私の恥ずかしさは限界に達した。
渾身のビンタを彼に叩きつけた。
その後に今まで気付かなかったが、彼の横にいた何かが私に対して吠えてきた。…ドラゴンの子だった。
ありえない…ドラゴンがこんなことにいることも、人間と一緒にいることも…　そうして固まっていた私に彼は謝罪を述べた。ようやく私は我に戻り、自分が裸なことを改めて認識し、服を着に行った。私は岩陰で、どうにか落ち着くことができた。

彼には名前が無かった。だから私が付けてあげた。その際に私は彼から握手を求められた。自分でも驚く程に自然と握手をした。私は男性と仕事の話など以外のプライベートな話をしたことがないに等しいのだけれど、彼とは普通に話せれた。
他にも彼は知らないことばかりだった。子どもでも知っていることさえも知らなかった。もしかすると？と思い私は彼に聞いた。
…やはりそうだった。彼は異世界から来た人だ。この世界に異世界から来る人がいると聞いたことがある。彼らは皆特別な力を持っていたらしい。ますます、彼に興味を持つようになった。
オーガ、この地域には生息しない魔物のはずなのだが、いた。幸いオーガは何度も倒したことがあるので、すぐに倒せれた。先ほどのオーガといい、ドラゴンといい、これは彼の影響なのか？
そして、彼は聖剣を手に入れた。こればかりはしょうがない。私

には資格がなかったのだろう。
……聖剣が少女に変わった。それも私とは比べものにならないほどの可愛さだ。私もエルフの血が流れているためか、胸には自信が無いが、他のウエストやヒップ、身体のしまり、そして顔には自信があったが、ものの見事に打ち破かれた。
問題はその後だ。契約内容だ。彼が聖剣を愛す？
意味がわからない
いや、そうではないな。口では上手く言えない感情がそこにはあった。

そして、ヤツが出てきた。ヤツは多分、アンデットのたぐいだろうが、相当上位の魔物だ。もしかしたら、『神魔』クラスかもしれない…
もし、ヤツが神魔クラスならSSランク三十人以上の大隊か、勇者クラスでなければ相手にならない。今の戦力差なら瞬殺かもしれない。
怖い……
これは逃げなければヤバい！死んでしまう。
しかし私が何もする間もなく、ヤツは襲い掛かってきた。

我が名…いや、私の剣名はヘスペリデス。真名はエリュティス。
元は精霊だったのだが、とある事情により二万年前に剣となっている。今も剣のままである。
二万年間、その間ずっと私はこの森に結界をはっていた。結界とは言っても、単に結界内、つまりはこの森に入ってきた者が私の主

となりうる資格があるかを判別するだけのものだが。　そして、ようやく見つけた。二万年間待ち続けた待望の主を。しかし、実際にはその間ずっと眠りについていただけである。ほんの少し起きた時も、その時代の知識を学ぶためだけの時間だった。

彼は中々に顔は良かったのだが…私は契約する前、彼が私を触った時に彼の内面を見た。…私自身、この人に私の主になる資格が本当にあるのか、疑ってしまった。

彼は取り柄と言う取り柄は全く無かった。魔力は微弱、子ども並だ。動体視力や筋力などの肉体面もとてもひ弱だ。なら、何故私は彼を迎え入れたのか？そう思い、私はさらに彼の奥を見た。……驚かされた。何の神かは分からないが、彼の中の最深部は神によって厳重に閉ざされていた。

私はいろいろ思うところはあったけど、彼を主として契約をした。契約と言っても我ながらおかしなものだと思っている。普通、対価として『愛せ』なんてのはありえない。だが、仕方がない。これは私が剣になったことが深く関わっている。

契約後、私は人型、もともとの精霊の姿に戻った。口調も今の女の子のようにした。主を最初に呼んだ時も、少し口調がおかしかった。待望の主を見つけたので舞い上がっていたので、つい、変に女の子の口調と古めかしい言葉を混ぜて言ってしまった、と言う感じだった。

主も驚いていた。いきなり剣から人型に変わったのだから。たぶん彼は口調から、おやじ的な性格の人格があるのだな、と思っていただろう。俗に言うギャップ萌？と言うやつか。

最近知ったのだが、イマイチ分からない…

おもしろい主を見つけたな、と思っていたが、主に気をとられて気付かなかったけれど、主は女を連れていた。…寝取るか…と本気で思った。私と主の契約で主は私を愛さなければならない。なのに、

なんで…
だから私はすぐに主に執拗に身体をくっ付け、忌々しいあの女に敵意を向けた。
正直、ここまでは他愛もないことだった。
ヤツが出てきた。不死の性質を持つアンデットだ。それも『神魔』だろう。アンデットの神魔は力自体は神魔でも低いほうだが、死なない…正確に言うと死んでも蘇る。それも死ぬ前よりも力を増して。だからアンデットの神魔は死んだ数が多いほど強い。
ヤツのあの魔力。どこか覚えのあるものだが、思い出せない。
…そうではない。今、考えるべきことは、どうやって逃げるかだ。今のメンバーでは何があっても、絶対に勝てない。
逃げる手を考えなければ、何か良い手立ては…
その数秒間の硬直が命取りになった。
そして、ヤツは私達にヤツは襲い掛かってきた。

『早速だが、貴様ら…死に絶えろ』
そう言って、ヤツは俺たちに襲い掛かってきた。ヤツは空気こそ気持ち悪いものだったが身体は黒髪黒目で肌の色は少し薄く日本人に近かった。
そんなヤツと俺たちとの距離は十メートルは軽くあったのだが、一瞬で距離を詰めてきた。
『先ずは貴様だ。小僧』
俺の目の前に来た。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。
死にたく、ない…
死にた……い。
目は涙が出る直前で、息は荒く、とても、とても…怯えていた。
さっき、ヤツに恐怖を感じたとか考えたが、そんなものは嘘っぱちだ。だって、目の前にヤツがいるだけで俺は、何もできないだけでなく、自ら死にたいと思ってしまった。
それこそが本物の恐怖だ。

「はぁあああ！」
エリーはあの驚異的なスピードに反応し、右手を地面に垂直にあげ、手のひらを開いて地面に向けて、力を込めるような声を出した。その瞬間、エリーの近くの地面から数本の土の手が出てきた。それも人を十人は簡単に掴めるのではないかと思うほどの大きさだ。
助かった…と思ったが、ヤツには意味が無かった。エリーの術で造られた手はヤツに当たることさえできなかった。途中でいきなり横へ横へ逸れていった…まるで、手がヤツを躱している様に見えた。
「え？なんで…」
エリーは意味がわからない、と言いたそうな顔をした。
とうとう終わった。死んだな…俺が死を確信した時だった。
「ガアアアアアアアアアアアア！」
シャルの咆哮だった。魔力が込められているのだろう。エリーを初めて見たときと同じような感じがしたので、そう思った。
……ヤツが数メートル後ろに飛ばされた。……倒れた。ぴくりともしていない…
「やったのか…？」
シャルはドラゴンだ。子どもだって強いはずだろう。

ヤツが倒れて一分ほどたった。ヤツはまだ、ぴくりともしない。
しかし、何故だ…？
何故、まだこの気持ち悪い空気が消えない？

『ふはははは！』
そう言ってヤツは立ち上がった。
『そいつはエンシェントドラゴンだな！？』
「「！！！！」」
「…？」
二人は『エンシェントドラゴン』と聞いたとき、とても驚いた表情をしていた。
「…エンシェントドラゴンって？」
言ってから気付いた。今はこんなことを聞くような状況ではないことを。

「…エンシェントドラゴン。それは、至高のドラゴンにして、最強のドラゴンと呼ばれている『神獣』よ」
へぇー、シャルってすごいんだな！
正直、凄さの程度がわからない…

『そいつを我が僕にし……！』
ヤツの目がエリーに向くと、ヤツは突然何かを思い出したように見えた。
『おっと、目的を忘れておったぞ！まずお前を殺さなければな！』
ヤツはそう言って右手の人差し指を……エリーに向けた。
……何故？
「どうして私からなのですか？」
エリーがもっともな質問をした。
『……貴様らには関係がない。待望の復活で浮かれて口が軽くなっておったが…殺す』

言い終えるのと同時にヤツの身体が変化していった。髪は白く、目は赤くなり、身体の色は…まるでゾンビの様な青と黒を混ぜたようだった。肩から腕にかけてはどす黒い雨雲のように気体か固体かがわからない物になった。
「…思い出した…」
エリーがぽつりとそんなことを言った。そしてこう続けた。
「ヤツの名前はクドラク。吸血鬼の原点の一つよ。」
吸血鬼…元の世界でも生まれた理由には多くの説があったはずだ。この世界でも同じようだ。
「どうすればいいの？」
リリーがエリーに聞いた。
「分からないわ…クドラクは光の加護を受けた者にしか倒せないの…」
「そんな…」

『無駄話は終わりだ』
再びクドラクがエリーに襲い掛かった。

〈05〉決意

クドラクがエリーを襲う。クドラクの腕は伸縮自在に動き、細かく交わしているエリーの動きに反応して追い続ける。そして、エリーはとうとうヤツ手に捕まった。それはまるで雲のようにエリーの全身を包み込んだ。

俺は慌ててリリーを呼ぶ。

「リリー！エリーが……！？」

「――――――――」

リリーにエリーの助けを求めようとしたが、リリーは大きく後ろに下がって何かを唱えていた。シャルはその隣にいた。こんな時に何をしているんだ！

エリーは無言で全く焦った様子もなく包み込まれた。

そして包み込まれたすぐにクドラクの手が光りだした。

――いや、そうではなかった。光っていたのはエリー自身だった。

「――っ」

俺はあまりの眩しさに目を開けていられなかった。

…その一瞬のうちに何かが起こったようだ。…クドラクの腕が無くなっていた。

エリーは一体何をしたのだ？

そしてエリーはもう一度地面から、今度は大量のの土の手を造った。

それらが一斉にクドラクに四方八方全てから襲い掛かる。クドラクは態勢を崩していた。これなら当たる…そう思えたのだが…

クドラクは…笑っていた。そして、やはりまたしても土の手はクドラクに当たらなかった。またしても土の手が躱していった様に見えた。

『愚か者め。まだわからぬか？』

クドラクはもう回復したようで、立ち上がっていた。
…やはりあいつが何かを仕掛けていたようだ。

『この洞窟の中が我が魔力によって支配されていることを』
「！！？…いつ魔力をこの洞窟内に溜め込んだのですか？あなたは封印されていたはずでは？」
エリーは明らかに声を落として聞いた。臨戦態勢をとっているのだろう。

『教える必要などないな。クククッ』

クドラクは口元を緩め、人を小馬鹿にしているように笑った。
そして、またしてもクドラクは高速で移動した。今度はエリーの後ろを完全に取っていた。

「後ろだ！エリー！！」

俺は少し離れた所から全体を見ていたので反応できたが、エリーは気付いてない。エリーは俺の声に反応して、ようやく気付き、後ろに振り返ったものの、一瞬遅かった。

「――――――」

クドラクはエリーの背中にいつのまにか普通の人の手の形になっていた手を当てた。そして、ヤツは初めて口で何かを言った。だが、聞き取れない。ただ、聞こえなかっただけなのかもしれないが…俺にはクドラクが人の認識できる言葉を発したのかもわからない。ヤツの口から音が出たことしかわからなかった。

クドラクが言い終わると同時に先程のエリーの光とは真逆に黒い光を輝かせた。そして……エリーが倒れた。

そのまま仰向けに倒れたエリーをクドラクが見下ろしていた。その目はまるで虫けらを見るような目だった。

間違いない。クドラクはエリーを殺す気だ！！

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

俺は…走っていた。エリーを助けるためなのが、頭の中は空だった。何を考えて走りはじめたのかも、正確には分からない。

俺のようなガキが出ていって、どうなる？

死ぬだけだぞ！

走っていると、そんな考え頭の中に浮かんできたが足は止まらない。

『身の程をわきまえろ』

クドラクは右手をこちらに向けてきた。

「――――……」

ああ、俺、何で走ってんだろう。エリーとはさっき会ったばかりなのに…

「――破ぜよ！」

いきなり後ろからリリーが声を張り上げた。

今までリリーはずっと小声で何かを言っていのは魔術の呪文だったのだろう。

「風侵食〈アネモス・ズィアヴロス〉」

…何も起きない。

失敗したのか！？

もしや、「かまいたち」のように時間差の攻撃か？

そう思ったのだが、それにしてはクドラクも何もしてこない。…明らかに隙だらけなに…

…どういうことなんだ？何が起こったんだ？

……だが今は…

「おぉぉぉぉぉ！！」

俺はそのままクドラクの目の前にいるエリーを抱いて、リリーのもとへ戻った。

「…うっ……あっ…」

エリーは意識こそあるが、動ける状況ではなかった。

「はぁ、はぁ。リ、リリー。ど、どうなっているんだ？エリーは大

丈夫なのか？」
「…エリーは少し経てば動けるようになるわ。だけど、クドラクは後、五分ほどしか縛れない…」
「やっぱりあれはリリーの魔術なのか？」
「ええ、風侵食〈アネモス・ズィアヴロスィ〉。術者の魔力を込めた風を相手の身体に巻き付け、動きを止める術よ。かなりの魔力を込めたんだけど、ヤツ相手では五分ほどが限界でしょうね…」

…なるほど…
そのために後ろで魔力を溜めていたのか。シャルはさしずめ、護衛と言ったところか…

……何もできてねぇの、俺だけじゃねぇか……

俺は、ブンブンと頭を何度か振って、気持ち切り替え、そしてリリーに尋ねた。

「こ、これからどうすればいいんだ？」
「…エリーが動けるようになるまで時間を稼ぐしかないわ！…悔しいけど、クドラクにはエリーの光の力しかきかない…」
「エリーを担いで逃げるのはダメなのか！？」

誰が好き好んでこんな場所にいるのだろうか？逃げるのが一番良いはずだ！

そう思い、リリーに聞いてみた。
しかし…こんな非現実的な場面でも、現実は時も厳しいことを俺は実感する。
「逃げられないわ。逃げたら後ろから殺されてるわ…生き抜くにはヤツを殺すしかないのよ！」

そんな…あんな化け物を……そうだ！

「シャルは闘えないのか！？最強のドラゴンなんだろ？」

シャルなら！

「ぴゃあ！」

コイツもやる気だ。

いけるのではないか？

「ダメね…」

さらにリリーは続けた。

「エンシェントドラゴンが最強たる所以は膨大な魔力と知識なの。彼らはそれによって、ほとんどの生物が使えないような魔術を使えるのよ。」

「なら―」

「だけど、それは何百、何千年の月日を経てこそ真に使いこなせるようになるの…今のシャルなら簡単に殺されるわ…」

そんな……

俺の希望はまた一つ減り、反対に絶望は増える。

「だ、大丈夫ですよ…」

エリーがようやく動けるようになった様で立ち上がって言った。

「私がヤツを…殺しますから！」

そうエリーは笑って言った。声や身体はふらふらなのにそれでも俺に笑って……本当によく立ち上がったな、と言えるほどなのに…

「デル様は絶対に殺させません。だから心配しないでください」

エリーは優しく、そう言った。

俺を元気づけるために…

「私もあなたを何があっても死なせないわ」

俺に不安がらせない様に……

ある少女は決意を決めていた。ここから生き残ることを……今日初めて会った、それだけの関係しかない少年を守ることを…

ある剣の少女はクドラクを殺すと言った。それは全く力を持っていない、ひ弱な契約者である、ある少年を守るためである…

二人とも俺を守ろうとしている。それなのに……俺は…俺は！力が無いからって諦めて…みんなが必死に闘おうとしているのに…くそっ！

……

…

「…俺も闘うよ！」

「あなたじゃあ無理よ！」　そうリリーが目を大きく見開き、声を張り上げて言った。

「…いやだ」

「え？」

「俺も闘う！」

俺も軽い気持ちで言ったわけではない。正直に言うと、こんな危

ないとこらからは今すぐ逃げたい。だけど、それでも魔力を大量に使って疲れているリリー、クドラクの攻撃を受けて、立っているのもやっとなエリー。

俺を守ろうとしてくれている彼女達だけを闘わさせたくない。闘わせるわけにはいかない。無力な俺だけど、それでも！

「俺も、俺だって、死にたくないよ……だけど、それ以上に二人に死んでほしくない！二人には生きていてほしい…笑っていてほしい。だから、俺も……闘う！！！！」

「……」

「……」

その気持ちがリリーに届いたのだろうか。リリーとエリーが話しだす。

「エリー、デルはあなたを使いこなせる？」

「……たぶん、無理ですね」

「どうして…？」

俺は率直な質問をした。

俺が契約者なら使えるのではないのか？

「いろいろ理由はありますけど一番大きな理由はデル様が――」

「俺が…？」

「弱いからです」

それは当たり前の答えだった。俺がいた世界で命のやり取りの経験などあってたまるものか！？
ケンカすら数えるほどしかしたことがない。
だけど、今はそれが、とても俺の心を締め付ける。

「そんなことは俺自身が一番分っている。それでも――」
「はぁ」
リリーが俺の言葉を遮り、こう言った。
「邪魔。足手まとい。いるだけで迷惑なの！」

一瞬の静寂。そして…
「小娘ー！！！！」
激しい怒気。
エリーがリリーの言葉に反応し、リリーの胸ぐらを掴んだ。契約者である俺に対しての物言いに怒りを顕にしているようだ。
だけどリリーはただ、俺を闘わしたくない…死なせたくないからこのような言い方をしているだけだろう…

「貴様、デル様のお気持ちを！！」
「あなただってデルが弱いと言っているてしょ！？」

二人の口論が始まった。　…俺の弱さが原因で…

しかし、もう無駄にする時間はない。もうすぐクドラクが動けるようになるだろう。

「二人とも落ちつ――」
落ちつけ、そう言おうとした時だった。

『ふふ、随分困っているな。小僧よ』

「――なっ！？」
クドラクからの念話だった。この気持ち悪い念話はヤツだ。
俺は振り返り、ヤツを見たが、ヤツはまだリリーの術によって動けていない。
『そのまま黙っておれ。言いたいことは考えるだけで、読み取ってやる』

どういうことだ？ヤツが俺に話があるのか？
ヤツにとって俺は虫けらに等しいだろう…なのに何故俺に？
『我はもうお前ら如きどうでもよい。待望の二百年ぶりに復活をはたしたのだ。』
…復活…ということは死んでいたのだろうか…？
『その二百年間お前に何があったんだ？』

クドラクは言う。そこには憎しみがこもっていたように思えた。
『…うむ。我はとある敵に負けて死んだ。』
そこは予想がつく。その後が重要だ。
どうするばヤツは死ぬのか、という情報を少しだけでも聞き出したい。

『そうだ。だが、不死の肉体を持つ我は死ん後、数日で復活できるはずだったが…死んだ場所が悪かった』
『死んだ場所ってここのことか？』
『そう、此処だ。此処はそこの女がいた…』
『エリーがどうかしたのか？』
だから、エリーを真っ先に狙ったのか！？

『話は最後まで聞け！人間風情が！ヤツは何もしておらぬ……我にとってはヤツがおることだけでだめなのだ』
『いるだけで？』
…どういうことなんだ？
『そうだ。ヤツは光の力を持っておる。そして、この地にはヤツの力が流れておるのだ。…我は死んだら一度地面に潜るのだ。そうして潜ったのは良いがこの地に流れておるヤツの力によって復活出来なくなってしまった。しかし、ヤツが地面から抜かれたことによってようやく復活出来たのだ、今しばらくはのんびりとしておきたい訳だ。だから闘いは止めだ。』

エリーが地面から抜かれたことによって……？
『それは俺がお前を復活させたわけなのか！？？』
『そうだ』

！！！！！
俺の…せい…なのか…

刹那、俺の中に大きなもやもやが生まれた。
罪の意識だ。

『しかし貴様が、どうこう等関係なしに、我は復活したのだがな』
『……ど、ういう、ことだ？』

俺の頭にその言葉が届く迄わずがに時間がかかった。

『先にこの地は我が魔力で満たされていると言ったはずだ』
…どういう意味だ？

『だからその魔力で俺はそこのエリーとか言った女を殺して復活出来たのだ』

『なっ！！！』

『だから――』

俺は大きく怒鳴ろうとしたが、クドラクは何故か、優しくとも、悲しくとも見られる表情をして言った。『君が気にすることではない』

何故だろう。

一瞬、クドラクの中に今まで感じていた黒いものとは異なり、何とも言えないものがあった気がした。

俺は何を考えているんだ！！

あいつは敵だろうがっ！

俺は頭を切り替えて話を戻した。

『―けどっ！闘いが止めって…先に襲ってきたのはお前だろうがっ！！』

『生きるためだ。貴様等とて今、生き残るために我を殺そうとしているではないか』

話が戻ると、クドラクは最初の時のように黒い雰囲気を持っていた。

『……くっ』

『交渉成立だな』

この交渉は成立させるべきか…

『…しばらくのんびりした後にお前はなにをするをだ…？』

俺はふと思ったことを聞いた。

『力を回復させる』

『力を…？』

『そうだ。今、我が力は全快時の半分の力もない。そのような状態で闘いたくないのだ。…負けはしないだろうが深い傷を負う可能性があるのでな』

そこ迄は、俺もしぶしぶ納得した。しかし、クドラクは、こう続けた。

『――だから人を食らう』

！！！！？？？？

『ひ、人を食らう……？？は？お前！どういうこだ！？』

クドラクは、何がおかしいのかが分からないような様子で答える。

『？…何がだ？魔族にとって人とは最高の栄養なのだぞ。それを食わずしてどうする？……ああ、己の身の心配か？大丈夫だ。貴様等は力を戻した後も食わないと誓おう』

『……』

『どうした？そこの小娘達にも危害を与えないのだぞ？』

『……本当だな。本当に二人に手を出さないんだな？』

『ああ、誓おう』
『……わかった。…お前を……見逃す』
『ならば、念話を切るぞ。現実の時間では十秒も経っていないから安心していいぞ』

気持ち悪さが無くなった。本当に念話を切ったのだろう。すぐ側ではリリーとエリーがまだ言い合っている。

クドラクとの念話での収穫は一つ。

それは俺の決意が固まったこと。

そして、その決意を二人に話す前に俺はエリーにいくつか尋ねた。

「エリー。エリーは今の人の形と剣の形の時のどっちの方が強い？」

エリーは俺が何が聞きたいのかが分からないようだが一応は答えてくれた。

「剣の形ですが…？」

「…ならどうすればエリーは剣に変化できるんだ？」

「…私が念じればなれます」

「エリー！！」

リリーが叫んだ。当たり前だ。エリーが剣になると言うことは、すなわち俺が闘うことを意味する。そして二人とも俺が闘うのに反対なのだから。

「…他の方法は？」
「…ありません…」
エリーが力強い目で俺を見つめている。
ああ。エリーはやさしいなぁ…
エリーの目は俺を守るための決意なんだとなんとなくわかる。…契約者だからだろうか？彼女の力強い目には、覚悟もあるだろうが、優しさで満ちあふれている。
それは、リリーもなのだ。彼女達は……優しい…
だから――
「…嘘だね！？他の方法があるよね？」
「……」
エリーが俺を力強く見つめたのと同様に俺もエリーを力強く見つめた。
「デル様が『剣成せよ』と言えばよいのです」
「エリー！あなた！！」
リリーの言葉を断ち切って、エリーが言う。
「ですが！」
彼女は力強く、さらに続けて言った。
「それは、私よりも力を持たなければ出来ません。今のデル様には

無理です」
「…そうか。わかった」
今の俺はエリーの方から「剣成」してもらわないと闘えないのか……
「なら、エリー。クドラクを倒す何か良い案はある？」
「それなら――」
ここからは俺を放置して、二人で、いかにしてクドラク倒すかを話し合い始めた。

…チャンスは一回。失敗は許さない。「剣成せよ」と言えばクドラクは気付くだろう。
……俺がヤツを倒そうとしていることを。
先ほどの念話では、気付かれない様にこの考えを押し殺していたが…俺の決意はヤツを、クドラクを倒して、皆でここを出ていくことだ。
本当は確実に生き残るためにはクドラクの持ちかけた交渉を成立させるべきなのだろうが…その代わりに多くの人々が殺されてしまう。
俺はクドラクを凝視する。
力が無いから剣成はできない？そんな言い訳はどうでもいい。やるんだ。なにがなんでも、やるんだ。

やらなければ、多くの人が殺されてしまう…

…言おう…エリーを剣成させよう…

「……っ！？」

…声が出ない…

何を今更ビビってるんだよ！俺！！

覚悟を決めたばかりだろうが！！！

俺はそう自分に活をいれようとするものの、俺の中にある感情は、恐怖しかない。

……怖い……

恐怖を追い払おうと意識すると余計に恐怖を意識してしまい、さらに怖くなってしまう。負の連鎖は止まらない。

怖い。

「デル！デル！！」

「デル様！！」

「えっ？あ、ああ…」

俺は彼女達のおかげで、ようやく我に返れた。

彼女達の目はとても俺を心配していた。

本当に何故今日会ってばかりの奴のことをこんなにも心配してくれるのだろうか？？

優しすぎだろ……

だけど、そのおかげで俺の覚悟は真に決まった。
大量の犠牲者を出さないためにクドラクを倒すのではない。
俺は、ただ…リリー、エリー、シャル、彼女達を守れれば他はどうでもいい。　ただ彼女達だけのために……

クドラクはまだ動けていない。だが、もういつ動いてもおかしくない。やるなら今しかない。

ドクン、ドクンと自分の心臓の音がはっきりと聞こえる。身体の震えもいつのまにか治まっていた。恐怖も無いとは言えないが、先ほどと比べると無いに等しい。

やっぱり助けられているのは俺だな…
俺は闘いでは何も役に立たない。むしろ邪魔だろうが、少しでもエリーの力を引き出し…彼女達を守る！！！

俺は大きく息を吸い、そして…

「剣成せよ！！！！！エリーーーーー！！！！」

俺がそう言うとエリーの身体が激しく光った

「えっ！？嘘っ！？」
「――っ！」

「えっ――」
「きゅう」

エリーは異様なくらいに驚いていた。俺とリリー、シャルはあまりの眩しさに目を開けていられなかった。
そして、光が消えると同時に俺の手には剣が握られていた。それは形こそ初めて見た時と同じだが…今のほうが断然、輝いている。
せ、成功だ。

いけない。こんな感傷に浸っている余裕は無い。
俺はグドラクのもとまで駆けた。
自分でも驚くほど速く走れた。クドラクとの距離は二十メートルと言ったところだが、それを一秒程で詰めた。この剣は契約者の肉体を強化してくれるのだろうか…！？
…ちょうど良い！

「うぉぉぉぉ！！！！！」
クドラクとの距離はもう五メートルもない。俺は剣を大きく持ち上げて、振り下ろそうとする。
決まりだ！

だが、クドラクの口は…笑っていた。
『貴様の考えなど読めておるわ！！』
くそっ！！

読まれていたのか！？

クドラクは自らの腕を巨大な狼の形にして襲ってきた。

…だが、俺にはもう剣を振り下ろすしか他になにも手が無い。…なら、全力で振り下ろすまでだ！！

「はぁぁぁぁぁ！！！」

俺の振り下ろした剣であるエリーとクドラクの狼型の巨大な腕がぶつかったことによって、ガッ！と鈍い音が洞窟内に響き渡り、そして……俺の振り下ろした剣はクドラクに止められた。

クドラクは両手を狼型に変化させ、その口となる部分で俺の剣を咥えて止めた。

そのままクドラクは片手を剣から離して俺に向けてくる。

『さらばだ。小僧…』

まただ。クドラクは悲しそうに言った。

何故だ？

と一瞬、そんのことが頭をよぎったが、そんなことを深く考えている余裕は俺には無かった。

やられる。殺される。

そう思ってしまったことにより、恐怖が再び俺を蝕んでいく。

そして、つい俺は目を閉じてしまった。

目を閉じた先には、リリーが見えた。今日の出来事が頭に蘇る。彼女には、からわかれた。彼女といるのは楽しかった。

彼女を好きになった…

そうだ。俺は生きる。リリーもエリーもシャルもみんなでここを出るんだ。

俺は死なない。誰も死なせてたまるか！！

そして、俺は目を開け、再び剣に力を入れた。

剣は、エリーは俺に呼応するかのように輝きをました。

『なっ！！』

クドラクは慌てて手を振ってくる。

しかし、遅かった。

俺はクドラクの手が届くよりも先にヤツのもう一方の手を切り裂いた。

剣を振り切ると同時に突然、剣から光の斬撃が放たれた。その斬撃はクドラクの胴体を切り裂く。

そして、その反動で洞窟内全体に突風が生じたのだった。

〈06〉犠牲

俺が振り下ろした剣から放たれた光の斬撃によって発生した激しい突風に俺とクドラクの二人はお互い、後方に吹き飛ばされた。

「うっ、がっ！」

俺は受け身の取り方を当たり前の様に知らなかったので、激しく地面に叩きつけられた。

全身が痛い…

打ち身や切り傷ができているだろう。

だが、俺はそんな痛みを気に留めず、クドラクは…？そう思い、立ち上がるよりも先に頭だけを上げてヤツの状態を確認した。

ヤツは俺の遥か前方にいた。だが、今のヤツには余裕と言うものが感じられない。それもそのはず。ヤツは両膝をついて唸っていた……片腕が失われ、胴体にもある深い切り口によって…

『ぐっ、うぅ……こ、小僧めが』

…効いている！！

どういう原理で放たれたかは知らないが、光の斬撃がクドラクにかなりの傷を負わした。

また、クドラクの腕がすぐに再生しない。

これはチャンスだ。まともにやっては勝てるはずなんてないだろうが、今なら！！

そして、俺はクドラクにさらなる攻撃を行うため両手をついて立とうとした。だが…立てれなかった。正確に言うなれば身体が動かなかった。特に手が全く動かなかったために立てれなかった。

さっき転がった時に痛めたか？

そう思って、俺はゆっくりと自らの視線を自分の身体へと動かした。

そこには、あり得ない方向に曲がっている両手両足があった。腕に関しては肘のあたりの皮がぱっくり開き、骨が血管を巻き付けて外に飛び出していた。白い骨はずの俺の腕の骨は大量の流血によって真っ赤になっていた。皮膚も地面も真っ赤になっていた。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

今までは全く痛みを感じていなかったが、今の自分の身体の状態を認識することによって、先ほどまでは感じていなかった激痛が俺の身体全身を襲う。

意識がどんどん遠ざかっていく。

「デルーーー！！」

「ぴゃあぁぁ！！」

リリーとシャルが俺の元に来た様だが、今の俺は立ち上がることもおろか彼女達に返事をすることさえままならない激痛に見回れている。

もう彼女達を見ることができない。どうしてもぼやける。視界が霞む。目の焦点があわない。

瞼が次第に重くなってくる。

「シャルはクドラクを見ていて！私はデルの傷を治すから！！」

…誰か、何か、言ったのか……？

「ぴゃあ！！」

…リリーと、シャルか？

シャルは俺の数メートル前で「グゥゥゥゥ」と低く唸りながらクドラクを牽制し、リリーは俺の隣に来て、膝をつき、手を俺の頭に当てて何かを言ってるらしい。

正直、もう何が何だか分からない。

「忘却〈オブリーオ〉――――痛み〈ドローレ〉」

リリーが何かを言ったその瞬間に――――

「あ、あれ…痛みが引いていく…？？？」

痛くない！？

血も止まってる！？

…また魔術なのだろうな。これなら…

「――っ！！」

しかし身体は動かなかった。それに加え、力を入れたその一瞬だけ再び意識が遠退くほど激痛が走った。

「動かないで！今は止血して、痛みを一時的に忘れさせているだけなの。だからまだ無理に力を入れると痛むから！！」

「っ……り、了解」
声は普通に出る様だ。
「じゃ、今から治療を開始するからね！」
「リェチ――――！！」
…リリーが術の途中で何かに驚いた様に言葉を切った。
「どうしたんだ？」
「……」
リリーはひどく思い詰めた顔をしていた。
「…やられた…」
「えっ…？」
どういうことだ！？
「デルの身体についた傷は呪いを纏っているの。クドラクに付けられたんだわ…」
呪い。
俺には縁の無いものだと思っていたが――
「纏っているって…つまり？」
リリーは深刻な顔で言う。
「…要はこの傷を治すにはかなりの時間がかかるわ…」
「時間がかかるってどれくらいかかるんだ？」
「少なく見積もっても、半日以上は絶対にかかるわ…」
「えっ！？」

半日！！？……くそっ！何をやっているんだよ、俺！せっかくクドラクに傷を与えれたのに……リリー達を守れると思ったのに……くそっ！！くそっ！くそーーー！！

俺の目にはほんのりと涙がみえ、顔には悔しさの表情しか出ていなかった。

隣のリリーは何かが吹っ切れた様な顔をしていた。

「…デルはエリーと一緒にここにいて」

「リリーはどうする気なんだ？」

「私は――――」

…まさか！！！

「私はクドラクを倒すわ」

「なっ！」

くそっ！やっぱりか…！

だが、先ほどリリーは彼女自身がクドラクには光属性の力しか効かないと言ったのに…そして、彼女は光属性の力を使えないのに…

「無茶だ！！！死ぬ気なのか！？」

「……デルは優しいね」

リリーは今にも泣きそうな顔で、声でそう言った。

「違う！！本当に優しいのは――」

リリーは俺の話を遮って言った。

「シャル、こっちに来て」「ぴゃう」

シャルはタッタッタとリリーのもとまで走って来た。

「それと、エリー。デルをよろしくね」

リリーはいったい何を言っているのだ？

何を言ってんだ？

『…貴様等ぁ、殺す、殺す！！！』

クドラクが念話でそう叫んできた。…腕も七割型回復していた。

あまり時間は残されてなさそうだ。

「そろそろクドラクも動きそうね」

「リリー、お前は何をしようとしているんだ？？」

リリーは俺のこの質問には答えずに代わりに優しい笑みを浮かべて両手を胸に当てて、こう言った。

「これから私があなたに託すものは私の心」

？？…リリーの心？

「今は意味が分からないと思うけど…意味が分かるようになったら大事にしてね……」

リリーがそう言い終えたとたんに彼女の身体が光で包まれていった。

「どうなっているんだ…？」

そして、リリーは俺の顔をわずかに持ち上げた。
そして…
リリーは自らの唇と…
……俺の唇を…
重ねてきた。
キスをしてきた。

甘く、長いキスだった。
そしてキスが終わるとリリーの身体から発していた光は消えた…

「……えっ！？」

当然、俺の頭では理解が到底及ばず、ただ顔を赤くし惚けるだけだった。
…顔が赤いのはリリーも同じだった…恥ずかしかったのだろうがなら何故こんな時に、しかも俺に……

そして、俺は一つの考えに至った。

まさか……

「リリー！！！お前、まさか――」

「半分正解ね。さっきのキスは別れのキスって意味だけじゃないわよ」

まだ意味があるのか？……違う！！！大事なのは…先ほどのが別れのキスでもあることだ。

俺は「ふざけんな！！」そう言おうとしたが……その瞬間、俺の身体が先ほどのリリーの様に光った。そして声が出なくなり…意識までも薄れてきた。

「リ…リ、ィィ」

「じゃあね、デル。さようなら……初恋で一目惚れのファーストキスだったんだよ」

リリーは泣くことを我慢していた様な顔をしていただが、彼女の頬には一滴の涙が垂れていた。

待ってくれ！
行かないでくれ！！

これがこの時の俺の最後の記憶だった。

そしてその後、俺は気が付くと、傷が治った状態で先ほどまでいたはずのクルル森の洞窟ではなく、どこかの海辺にいた。
辺りを見て回すと、クドラクはいなかった。

……だけど…

だけど、ここにはリリーの姿が無かった…
…隣にはエリーとシャルしかいなかった

俺はどういう事なのかすぐに分かった。

リリーが自らの命を捧げて、俺達を守ってくれたことを。

うっ、うっ……

リリー。リリー……

うぅぅ

クソーーーーー！！！　…リリーィィ…

俺は泣き続けた。エリーやシャルは俺を泣き止まそうとするが、意味は無かった。結局、そのままずっと、ずっと…

涙が枯れても心が泣き続けた……

そして、この事こそが二年前に俺が初めてこの世界に来た時の忌まわしき来事であり、これからの出来事の全ての始まりだった。

〈07〉入国（前書き）

これから第一章です。しばらくはゆったりとした物語が続きます。

未熟者が書いた作品ですが、是非とも読んで頂きたいです。

感想・評価もよろしくお願いします。

〈07〉入国

俺が二年前にこの世界に来た時に出会い…失った人。名前はリリー・フーリン。彼女を死なせてしまった事…それがこれからの俺の生き方を決めた。

あの時から俺の目的は一つ。…元の世界に帰ることではなく……ただ…ただ、リリーを殺した奴を…クドラクを殺すことだ。

俺はそのためだけに二年間、力と知識をつけ続けた。見た目は二年前と何も変わらないが、身体は無駄なく引き締まり、魔術や剣術を特に重点的に鍛え、この世界の事や魔術、魔物等のことも調べあげた。

ムー大陸最大国ヒラニプラ。ヒラニプラとはムー大陸にある6つの国の中でも様々な面で群を抜いる国だ。特に武力と商業が他の比ではないと言う事だ。

俺は一人でこの国の目の前の外壁まで来た。エリーとシャルとは共に半年前に別れた。――不仲で別れた訳ではない。この二年間色々とあったのだ。

…それで来たのはいいのだが…

「入り口どこだよ？」

そう、入り口と思われる門が見当たらない…

さらに、その外壁の大きさは並ではなかった。高さは数百メートルは軽くありそうであること、真っ白で傷一つない綺麗な円柱状になっていること、わかるのはそれだけだった。それ以外は予測が出来ない程大きかった。

「それにしてもデカいな…」

俺は入り口を見つけることを半ば諦めかけていた時、不意に外壁から魔力を感じた。そして魔力を感じた所には先ほど迄は無かったはずの六芒星の魔術刻印があった。

魔術刻印とは、身体に刻み込み、身体能力や魔力を上昇させるものや、空間転移魔術のための座標を固定するためのもの、呪印として刻まれたもの等と言った様々なものがある。今回のこの刻印は召喚の類だ。

「ゴーレムか…」

そこから喚びだされたのは岩で出来た全長五メートル程のゴーレムだった。

『人類発見。認証――未登録――新規登録必要――』

今しがた召喚されたゴーレムが無機質な感情のない音をだした。音であって声ではない。

そしてゴーレムはそれだけで消えた。

「…いや、待てよ！俺はどうすればいいんだよ！？」

俺がいきなり消えたゴーレムに腹を立てていると、突然、外壁に人がちょうど一人通れるような大きさの門が生まれた。そしてその門が開いたのだ。

俺は特に躊躇わず、門の中へと入っていった。

どうやら俺はこの二年間で度胸が増し、おまけに態度まででかくなってしまった。

門の中は受付の様な雰囲気を醸し出す部屋だった。　俺はそのま

ま前へと進み、前方にいる一人の女性のもとまで行った。
その女性の年齢は二十歳前後だろうな、と俺は彼女の見た目から推測する。彼女は金髪に茶色の目、皮膚の色は平均的な日本人より少し白く、スマートな体つきをしている。
美人ではあるが、半年前にとある事情で別れたエリーと比べると見劣りがする。まぁ、それは仕方ないことなのだが…エリーは口では表せないほど美しかったのだから。
「！――ようこそヒラニプラへ。本日がこの街に初めての訪問でよろしいですか？」
彼女は一瞬驚いていたみたいだった。たぶん俺の外見、白髪碧眼にだろう。だが、すぐに彼女はまるでアナウンサーの様なはっきりとした綺麗な声で聞いてきた。
「あ、あぁ、そうだ」
「この度この街に来たのは観光ですか？移住ですか？それとも何かの任務ですか？」
「移住だ」
「そうですか。移住でしたらまず、身体及び精神の測定を行います。こちらへどうぞ」
彼女はそう言って俺を彼女の後ろにある部屋へと案内した。
俺が案内されたその部屋には小さな壺が一つ机の上に置かれているだけだった。
「では、まずこの壺の中に入っている聖水について説明しますね。」
壺の目の前に着くと、彼女は説明に入った。

「この聖水は、一般的な聖水の様に浄化のためとは異なり、八百年前のヒラニプラ国王が精製された特別な聖水なのです。これに手を付けることによって、その人を国に入れてもよいかどうかを見極めるのです」

「見極めると言うと、どの様に見極めるんだ？」

「それでは、どうぞ」

彼女はすっと笑顔で俺に壺の中の聖水に手を付けるように促した。

…俺の質問は無視ですか！？

いささか釈然としないが、俺は手を付けた。

……

しばらく待つものの何も起きない。

「これはどうなっているんだ？もう抜いてもいいのか？」

「はい。結構です。あなたの移住を認めます」

…決まっちゃった……こんな簡単でいいのか！？

「一つ聞いてもいいか？」「はい」

「もしも認められなかった場合はどうなっていたんだ？」

先ほど説明をしてもらったが、肝心な所をはぐらかされていたので聞いてみた。

「…その場合は聖水によって全身を焼かれます。」

……は？…俺はそんな大事な説明もなしでやらされたのか！？

「申し訳ありません。これは決まりですので」

彼女は深く頭を下げて言った。…そう言われると仕方がないと思えてくる。先にこの事を知っていれば誰もやろうとしない。

「分かった。頭を上げて。この後はどうするんだ？」

「続いてはこのオウスカードにあなたの個人情報を入れ込みます。ちなみにオウスカードとはその人の身分証だと思っても構いません。しかし、ギルドや国に仕える方々はこれとは異なるカードを持っています。オウスカードは一般人用と言うことです。―それでは手を出して下さい」

俺が手を出すと彼女はがっちりと俺の手を握った。

「失礼します」

彼女はそう言ってどこからか取り出した小さなナイフを俺に向けてきたが、特に気にはしなかった。俺は二年前とは違う。こんなナイフごときでは深い傷すらも負わすことが出来ない。だからこんなことに取り乱したりしなかった。

そして、彼女は俺の指先を少しだけ切り、出てきた血をオウスカードに垂らした。

「これで完了です。後は体内にしまい込んだら大丈夫です」

「体内って……？」

「入れる時には身体に触れさせておいて『入れ』と、出す時には『出ろ』と念じればいいのです。また他人に一部だけを見せる、また

は隠す際にはその項目に対して『見えろ』、『隠れろ』と出し入れと同じく念じるだけです。」

俺は言われた通りに「入れ」と念じて身体に触れさせてみると、本当に体内に入った。

…マジか！

これは知らなかった。中々に驚かされたな！

そして、オウスカードが体内に完全に入り切ると同時に頭の中に情報が流れてきた。

名前：デルティネ
性別：男
年齢：十八
出身：不明
職業：なし
残金：八千八百アーク

これがオウスカードに入れ込んだ俺の情報なのだろうが…

ちなみに一アークは日本円にして百円程の価値だろう。…俺が勝手に判断しているだけだがな！

「なぁ、たったこれだけしか情報は入ってないのか？」

「これだけ、と申しますと？」

「項目がたったの六つしかないのだが…？」

「…その前に確認しますが、あなたはどこかのギルドに所属または仕事関連において個人で国に登録をしていますか？」
「？？いや、してないが…」
「でしたら仕方がありません。オウスカードにはギルドや国に認められることによって様々な情報が加えられていく物ですから」

なるほど。そういう事か。
「おおよそですが、一般的な成人でも三十ほどの項目はあります」
「分かった。ありがとう」
俺は一般人以下か…

「では、以上で終了となりますが、その前に質問はありますか」
「冒険者ギルドの場所を教えてほしい。それと安めの宿はどこかにないか？」
「それでしたら――」

彼女は俺の質問に対して懇切丁寧に教えてくれた。宿に関しては三つも候補を教えてもらった。

「それでは――」
「ちょっと待ってくれ！もう一ついいか？」
「はい。何でしょう？」
「君の名前を聞いてもいいか？」
「……」

じとー。
そんな目で彼女は俺を見ている。

「あ、あぁ、その、ナンパとかじゃなくて、ここには知ったがいないからさ、一人でもいるほうが何かと助かるら……悪い。俺の勝手だ」
「……いいですよ」
「へ？？？」

あれ？いいのか！？俺自身言った後にこの発言はナンパ以外の何でもない、と思ったのに……言ってみるものだな！

「その代わりに私が困った時にも手を貸してくださいね」
「それくらいは構わない」　どうせ俺の方が色々とお世話になるだろうからな！

「私はハインベルと申します」
「俺はデルティネ。よろしく頼む、ハインベル」

「ようこそデルティネさん。あちらがムー大陸最大の国ヒラニプラへの入り口です。」

そうして俺はヒラニプラへと――リリーの故郷へと足を踏み入れた。

〈08〉アムレト

俺はヒラニプラに入国するとまず宿探しを始めた。宿探しと言っても入国審査のときに受付の女性、ハインベルに教えてもらった三つの宿から選ぶだけなのである。

すでにその内二つは見てきた。見てきたのはいいが……想像以上に汚なかった。俺自身が安い宿がいいと言ったのだが、さすがにあれはなかった。……まぁ、安くはあったけどな…

残っている宿候補は一つ。少なくとも前の二つよりは、綺麗であってくれ！

そう思いながら着いた宿。その名はアムレト。

…ボロっ…！

…小さっ…！

またしても汚なかった。もしかしたら前の二つよりも汚いかもしれない。建物の大きさも十人も泊まれば、もう満室になるのではないか、と思う程だった。

最初の宿に泊まるか？

そう思いつつ、一応、アムレトに入ってみた。

中は外観ほど汚なくはなかった。むしろ綺麗な方だった。特に華美ではないが、机や椅子、床の手入れが見事だった。

もしかしたらここは当たりなのかもしれないな！

「どちら様ですか？」

奥の部屋から出てきたのは確実に俺よりも若い、十五、六歳であ

ろう小さな少女だった。
黒髪黒目で長い髪をポニーテールにしてまとめていた。そこには年相応の可愛さがあった。
「宿を探している者なんだけど、中を見せてもらってもかまわないか？」
「！！お、お客様でしたか、申し訳ありません。えっと、お、お一人様用の部屋でよろしいですか？」
「ああ、それでかまわない」
「そ、それではこちらへどうぞ」

そう言って彼女は歩き出した。
それにしても、俺が客だと知ってかなり驚いていたぞ、彼女。客の対応も不慣れそうだし……大丈夫か、この宿？？

入った部屋は少し小さい気もするが、受付と同様にしっかり手入れが届いていた。

「…い、いかがでしょう？」
彼女は不安そうな顔と声をして聞いてきた。
「…そうだな、ここにしよう」
「本当ですか？」
彼女は不安から一転、とても嬉しそうな顔に変わった。
「ああ。そうだな…十日間でいくらだ？」
「十日間ですと、えっと、四百アークです」
四百アーク！
と言うことは日本円にして四万円ほどだろう……一日あたりは…四千円。安すぎではないか！？
前の二つの宿でも、十日間あたり八百アークと七百二十アークだ

った。これでも安いと思うのに…

「ちなみに飯と風呂はどうなっている？」

「どちらともこちらで用意させていただきます」

最後に当たりがきたな！

…安いのは良いのだが、これだけは聞いておかなければならないな…

「ここの主人や他の従業員は？」

彼女の顔が暗くなった。

「……父と母は二人とも三年前に他界しました。ですので、私がこの女主人で、唯一の従業員です。…私は両親が残したこのアムレトを残したいと思い、頑張ってるのですが、なかなか上手くいかなくて……ハハハ…」

やはりというか何というか聞くべきではなかったかもしれないな。彼女は無理に笑ったが…その表情は曇っている。

「この宿は潰れそうなのか？」

俺は直球で聞いた。もう少しやんわり言うべきなのかもしれないが、そういうのは俺には出来ない。

「……正直言って厳しいです。今はまだ両親が残してくれたもので、どうにかなっていますが、もう少し、したら……」

店の者が客にこんなこと言うのは、かなり危ない。下手をすると

客が逃げてしまう。それなのに彼女は言ってくれた。

「君の名前は？」

「は、はい！ぼ、僕の名前はルルと言います」

僕っこ！？

僕っこなんて初めて見た…

「俺はデルティネ。ルル、突然なんだけどこれを受け取ってくれるかい？」

俺は魔具の「深海の袋」から三千アークを取り出した。

深海の袋。それは言ってみれば、いくらでも物が入る袋。袋の中の次元を歪ませて、無限の空間を創りだす。ただそれだけだけど、とても便利だ。しかしこれは袋の中に手を入れるときには手に魔力の保護をしなければ、逆に無限の空間に取り込まれてしまう。だから、この深海の袋は魔力を持つ者にしか扱えない。

そして俺は取り出した三千アークをルルに渡した。

「…えっ？」

だから何の気兼ねなく、受け取ってくれると俺としても嬉しいからさ、受け取ってくれるかい？」

俺は優しく言った。

「…あ、ありが、とう、ございい、ます…」

ルルはそう言うと同時に泣き始めた。

「え、え??俺、何か泣かせるようなことした??」「ち、違うんだよっ。ただ、ただ、嬉しくて…人の優し、さ、なんて、長いこと、受けることが、なかったんだ……だから、これは嬉し泣きなんだよ」

ルルの言葉遣いが変わった。多分こちらが普段のルルなのだろう。そして、ルルは泣いていても顔は喜びで満ちていた……よかった……

それにしてもルルも大変だったんだな…

俺はルルの頭の上にそっと手を置き、彼女が泣き止むまでその手を置き続けた。

ルルが泣き止んでから俺はアムレトに十日間の契約をした。さらに良いことに普通なら朝・昼・晩の三食と風呂まで付いて四百アークのところを昼時は色々と動き回るから昼飯はなしと言うことにしたら十アーク安くなり三百九十アークになった。

アムレトを紹介してくれたハインベルに感謝だな！　…三千アークは痛かったが……お金は計画的に使わないとな…

けど、その分ルルが喜んでくれたからよしとしよう！

そして契約を終えた俺は冒険者ギルドに足を運んでいる。

このヒラニプラの唯一の冒険者ギルド、名は、道を切り開く者〈ロードメイカーズ〉。

この異世界で何故日本語やカタカナがあるのかと言うと、俺の頭の中にあるからだ！！……言い方が悪かったな…

この世界には、共通語が無い。まぁ、この世界では当たり前なのだが…

この世界には口から言葉を発する生物は人類以外にもいる。さらにその中には人類と交流がある種族もいる。だから人類は身体に「全自動翻訳術」と言う魔術を仕込む。俺も一年と半年程前に仕込んだ。

これは仕込んだ者は発した言葉が相手が分かるように自動的に翻訳し、逆に相手が発した言葉を聞く時も自動的に翻訳される。これは片方だけでも仕込んでいれば、会話は成り立つが、ムー大陸全土での決まりとしてここに住んでいる者は全員仕込んでいる。

例えば、二年前にあの憎きクドラクが一度だけ口から言葉を発した時に聞き取れなかったのはどちらも全自動翻訳術を仕込んでいなかったからだ。

そのような事が起きない様にこの術はムー大陸の者は全員仕込むのだ。

アネモネから歩くこと十数分。俺はようやく、ロードメイカーに着いた。

ムー大陸六国の冒険者ギルドの中では最大ギルドと呼ばれるだけあってそこは広かった。木材で作られているものの少し元の世界の西洋の建物をイメージさせらる建物だった。

ギルド。この世界にはたくさんのギルドがある。数も多いが、ギルドの種類も多い。

特に大きな力を持っているのは、冒険者ギルド、騎士ギルド、魔術師ギルド、医療師ギルド、殲滅師ギルド。そして勇者連盟、英雄。後は小さな小ギルドや闘いとは関わりのない商人ギルド等だ。また、闇ギルドと言うのもあるらしい。

冒険者ギルド。彼らは日々、人類の未踏の地に足を運ぶ。だから何が起こるか分からない。よって彼らに求められるものは総合力だ。

騎士ギルド。彼らは日々、自らの国を護るために尽力している。また彼らは要人の護衛をする事もよくある。よって彼らに求められるものは、人を護りながら闘える視野の広さだ。

魔術師ギルド。彼らは物理攻撃の効かない相手の戦闘と日々、新たなる術を創りだしている。だから魔術師に求められるものは、魔力の強さと研究心だ。

医療師ギルド。彼らは治癒魔術によって傷ついた人々を癒す。また、魔術師ギルドと協力して、呪術の解呪方を研究している。よって彼らに求められるものは、通常の傷や呪術等を治療する高度な医療術。

殲滅師ギルド。彼らは人々に害をなそうとする者の殲滅。よって彼らに求められるものは、ただ、純粋な強さだ。

勇者連盟。彼らはムー大陸には三十人ほどしかいないらい。勇者連盟に入るには何か特別な試験を受けなければならないらしい。しかし彼らは一人一人が「亜神」や「神魔」とやりあえるほどの力を持つ強者達。

英雄。彼らはムー大陸には五人しかいない。彼らも勇者連盟同様に入るには何か特別な試験を受けなければならないらしい。しかし彼らは個々で「神」とやりあえる最強の人達だ。

闇ギルド。奴等は殺人、強盗、誘拐と言ったありとあらゆる犯罪行為を行う悪人どもだ。

話は戻るが、俺がここ、ロードメイカーに来た理由は二つある。一つ目の理由は、二年前にリリーが言った言葉にある。リリーは、ここのギルドマスターが異世界人の書いた書物を持っていると言った。

これはもしかしたらこの世界から帰れる方法を見つけられるかもしれないが…正直無ければ無いでいい。

重要なのは二つ目だ。それは……現在のクドラクの足取りを掴むことだ。

…ヤツだけは絶対に殺さなければならない。絶対に……
これは贖罪だ。あの日俺のせいでリリーは死んだ。だから…だからヤツだけは何があっても俺が…殺す！
…いけないな。ヤツの話をすると、どうしても怒りが、憎しみが押さえられない…

そして俺はロードメイカーに入った。
まずは受付に行った。

受付係は五人いた。俺は一番落ち着いた雰囲気を醸し出している女性を選んだ。

！！近いて気付いた事があった。彼女は……巨乳だ！！！
身長は座っているため正確には分からないが、俺と同じくらいで、赤い髪のロングのストレートに薄い赤さを持つ目。そして、巨乳！！

何というか色々とけしからん奴だ！！

おっと、取り乱したな！平常心、平常心。

「少し聞きたい事があるんだけど…」

俺はその受付の女性に話し掛けた…ギルドマスターと話せるならそっちの方が良いのだが、いきなりギルドのトップがよそ者の話を聞くはずがない。

「はい。どのような事柄でしょうか？」

俺はいつも以上に真面目に言おうとする。どうしても声がいつも以上に低くなってしまうが…

「ギルドマスターが持っている異世界人が書き残した書物と……クドラクの行方についてだ」

「！！！」

彼女はかなり驚いている様子を見せた。大きく目を見開き、俺を凝視してきたのだ。

「少々お待ちください」

彼女はそう言って、奥の部屋に入っていった。

待つこと五分。彼女と一緒に出てきたのは二十代前半くらいの上司であろう男性だった。彼は長身でちょっと長めな金髪に金色の目を持ち…顔立ちも整っていて、落ち着いた雰囲気を纏っていた……

…要するにイケメン……

どうしてイケメンって滅びないのだろうか？？

顔は別として、彼が強者であることが雰囲気で分かる。落ち着いた雰囲気とは別に彼の奥にはかなりの力が見える。

「待たしてすまなかったのぉ。儂がここのギルドマスターのアーク
ベル・クライツ・メルトじゃ。」

〈09〉ギルドマスターの思惑

「本当にあんたがここのギルドマスターなのか？」

俺は奥の部屋から出てきた一人の青年に確認のために尋ねた。

「いかにも。アークベルでかまわんぞ。それで、お主の名は？」

「デルティネだ」

本当にここのギルドマスターらしい…

ギルドマスターがこんなにも若いことにも驚いたが、それより素性も知れない俺に対してギルドマスターが直々に出てくるとは思いもよらなかった。

いや、出てきたらいいなぁ、とは思ったけど、さすがの俺もそんなことはないことくらい分かってたつもりだったのだが……まさかな…

「それでだ。クドラ――」

「こちらへ来い」

アークベルは俺の言葉を遮って言う。そして奥の部屋へと俺を招き入れようとする。そこには、ここでその話をするなと、無言で語っていることが分かる。

奥の部屋はアークベルの、ギルドマスターの部屋なのだろうが……余りにも汚い。散らかった書類や服、用途が分からないもの等、多数あった。

「これはどういうことでしょうか？クズ男さん」

アークベルと俺の後に入ってきた受付の女性が言った。

…自分の上司をクズ男扱いしたのは気のせいだろうか……

「クズ男とは酷い言われようじゃのぅ」

「では、何とお呼びすれば宜しいでしょうか？それに二日前に私がどこかのクズ男に掃除されたれた部屋がまるで部屋の主のようなゴミになっているのですが、その点はどういうことでしょうか？」

気のせいではなかった。

「……何でもありません。儂はクズ男です…」

今のやりとりでなんとなくこの二人の関係が分かった気がする。

アークベルがだらしない人で、受付の彼女も一応は彼に敬語を使っている様だが、普通に上司を貶している。

ギルド内の立場的には当たり前にアークベルの方が強いのだが、一対一の個人的なところではアークベルの方がかなり弱いのだろう。

「おぉ、そういえば彼女の紹介がまだじゃったの。彼女の名はパルティア。

ここの受付係をやっておる。元ＳＳクラスの冒険者じゃ」

「パルティアです。よろしくお願いします」

「ああ」

「うむ。適当に腰掛けて構わんぞ」

俺は一応使えそうなソファーに座った。アークベルとパルティアは俺の正面のソファーに座った。

先に話しだしたのはアークベルだった。

「それでだ、貴様、その事をどこで聞いた？」

確かにアークベルは怒鳴ることなく静かに聞いてきたが、先ほどの彼の人当たりの良さそうな雰囲気とは異なり、今の彼からは威圧感しか感じない。

俺は唾を飲み込む。何もしていないのにも関わらず汗が止まらない。

気を抜けば殺される、そんな威圧感が俺に向けて送られてくるが、俺は怯むことなくアークベルの目をしっかりと見て、言う。

「アークベル…あんたはリリー・フーリンという女性を知っているか？」

「！」

「！！！！」

アークベルはほんの少しだけ驚いたようで、そのまま先程出していた威圧感を引っ込めた。

パルティアは「あり得ない」と言いたそうな、そんな何ともいえない複雑な表情をしていた。

「知っておるもなにも彼女はギルド間を越えて、ここにいるパルティアと組んでいたのじゃぞ！……！リリーから聞いたのじゃな！？」

「……あ、ああ…」

俺は小さく頷き返事をしただけで他には何も言わなかった。

深く重く暗い空気が流れた。誰も言葉を発っそうとしない。

そんな中、アークベルが口火を切った。

「……ふむ…分かった。儂等も覚悟は二年前にできておったしのぉ…」

アークベルは俺の表情や雰囲気で俺の言いたいことを察してくれたらしい……だけど、これは彼が察してくれても俺の口から言わなくてはならない。

「リ、リリーは俺のせいで…俺をクドラクから護るために……死んだ」

俺とアークベルの間にはどんよりとした空気が流れるが、パルティアだけは違った。彼女の中では色々な感情が渦巻いているのだろう。

「パルティア。少し外に出ていなさい」

アークベルは静かに告げた。何故か彼は真面目に話している時は口調が変るようだ。

「……分かりました」

そう言ってパルティアは部屋から出ていった。

「すまぬのぉ。パルティアも一応は元ＳＳクラスの冒険者。感情をコントロールするすべを持ってはいるのじゃが…リリーのことについては別のようじゃ。このまま、ここにいたらお主に襲い掛かっていたかもしれんからのぉ」

「……パートナーが俺なんかのために死んだと知らされたんだ。…

取り乱すのも仕方ない。俺を襲うのも仕方がないことだ」
「そう言ってもらえると助かるわい。…それでじゃ、リリーのことは儂は特に詮索せん。じゃがの、彼女の所属していた魔術師ギルドのギルドマスターには必ず話すのじゃぞ」

…リリーは魔術師ギルドにいたのか…そういえばリリーが使っていたのは魔術だけだったな。

「分かった。伝えに行く」

「なら、本題じゃのぉ。まずは異世界の者が残した書物についてかのぉ。その前に一つ確認するがお主は異世界の者か？」
「ああ、そうだ」

「なら、これを渡そうかのぉ」

そう言ってアークベルは分厚く紐でまとめられた書類を俺に差し出してきた。
「まさか…！？」
「そうじゃ。異世界の者が書き残した書物じゃ」

これが…俺が元の世界に戻るヒントかもしれない物か…

「…くれるのか？」
「馬鹿者が！！誰がやるかい！少しの間、一週間程貸してやるわ。じゃから、必ず返すのじゃぞ！！」
「お、おう。分かった」

び、びびった。いきなり怒鳴られるとは思いもよらなかった。

だが、異世界の残した書物を借りることはできた。

「次はクドラクについてじゃの。…まず、お主はヤツについて何を知っておる？」

「かなり強い奴としか……あとは、封印されていたヤツを俺が目醒めさせてしまったことくらいだな」

俺はこの二年間、ひたすら力ばかりを求めていた。正直その間に情報収集は全くしていない。そもそも、そのような伝も無かった。だから俺は戦闘に関してと日常で困らない必要最低限の知識しか持ち合わせていない。

「な！！！…いや、まあ良い。過ぎてしまったことじゃ。とやかく言うまい」

「ああ。助かる」

アークベルが深く詮索をしてこなかったのは良かった。エリーとの決めごとで話せない事がいくつかある。俺にはその事を上手く説明できないだろうからな。

それにしても、アークベルは意外と人の心の境界線を見極めるのが巧そうだ。

「ふむ…なら『神魔』は知っておるか？」

「ああ。その名の通り神の如き力を持っている魔物だろ」

「そうじゃ。なら『魔神』は知っておるか？」

魔神。初めて聞く名だが、名前から推測すると…

「魔物の神か？」
「一応は分かっておるのじゃな。ならば、『神魔』と『魔神』どちらの方がより危険か分かるかのぉ？」
「いや、分からないな」
名称は似ている。意味も似ている。
…分かるか！！
「答えは『魔神』じゃ。魔神は神の如き力を持つ『神魔』さえも従わせる程の力を持っている」
……それって、神を越えてねぇか？
「ここからじゃ。話は長くなるからの。その事を頭に入れてよく聞くのじゃぞ」
ごくり。俺自身が唾を飲み込む音。ほんの一瞬だがそれがはっきりと聞こえる程の静寂が生まれた。
「まず、クドラクはそもそも不死の力を持つ者の中でも特別なのじゃ」
「特別…？」
「話は最後まで聞け！質問はその後じゃ」
「お、おう」

…アークベルに怒られたり、驚かされたりばかりだな、俺…

「続けるぞい。クドラクは死んで蘇るたびに強くなる。そんな力を持っているのじゃ。…そこは既に此方とて分かっておったのじゃが……」

やけに歯切れが悪いな。不足の事態があったのだろうか？

先程、怒られたばかりなので俺は声に出さずに頭の中だけで思う。

だって、コイツが怒ると、声が大きくてびっくりするし…

「ヤツはヤツと同格と思われる『神魔』を大量に食らったのじゃ……そして『魔神』へと成長してしまいおった。それもただの魔神ではく、数体いる魔神の中でも最強という程に。勇者連盟からも三人が討伐に向かったのじゃが三人とも殺されてしもうた。……その事も関わりヤツのことはトップシークレットとなったのじゃ」

勇者が三人やられた。その事が意味することは、もうヤツは人類の中では英雄以外には殺されない。

いや、最強の魔神になっているなら英雄でも勝てるだろうか…

…まぁ、俺は勝つがな！

「お主何を笑っておる」

「？そうか、俺は笑っているのか」

俺は自分でも気が付かない内に笑っていたらしい。　だが、殺すべき敵が強くなっている。簡単には殺されてくれない。普通なら不安になったり、戸惑ったりするのだろうが、俺は――

それは好都合だ。ヤツを殺せば俺は……

こんなことを思っている。
この二年間で俺はいつの間にか戦闘狂になっていたらしい。

「それでだ。ヤツは今どこにいるんだ」
「わからぬ…勇者達が返り討ちにあって以来、さっぱり足取りが掴めぬのじゃ」
…足取りが掴めない、か。…また別のギルドから探ってみるか？
「そういえばお主にこの事はトップシークレットと言ったのぅ」
俺が席を立とうとすると、言葉で制された。
「？ああ、確かに言っていたな。分かっている。誰にも言わない」
「何を言っておるのじゃ？」
？…何が変な事を言っただろうか？
「お主はこのギルドのトップシークレットを知ったのじゃ。勿論、このギルドに入るのじゃろ」

…この腐れピエロが！！
コイツは俺に入るか、入らないかを聞いているのではない。
これは入らなければ、俺を潰す。そういう意味だ。
よくよく考えると、部外者にギルドのトップシークレットをそう簡単に教えてよいはずがない。

気付けよ、俺！！

しかし、俺をギルドに強引にも入れようとする理由……
ギルドの戦力増強か…？もし、そうならコイツは俺の力を正確に見極めたのか！？

「どうするのじゃ？」

コイツっ！！

アークベルは一見、優しそうに言っている様にも思えるが、彼の身体からどんどん闘気が出てくる。
そして、その闘気は確実に俺より強い力を持っている事を示している。

「…ど、どうして俺をギルドに入れようとする…？」
「うむ。お主は自分の力の稀少性が分かっとらんようじゃのぅ。…まぁ、端的に言うのならばお主の力を見込んでという事じゃな」

くそっ！！
コイツ、俺の力を俺以上に分かってやがるのか！？
こんなの選択肢なんてねぇじゃねぇか！！！

「……分かった。このギルドに入ってやるよ…」
「うむ。そうか、そうか」

「ただし、条件がいくつかある」

このままコイツに主導権を取られたままでは、絶っっっ対にダメだ。

こんなピエロに付き合ってたら人生の終わりだ。

「ふむ。条件次第じゃが、どのような条件じゃ？」

「一つはクドラクの事についてはどんな些細な事でも俺に伝えること」

「…よかろう」

「もう一つは俺にここの生活様式とかを教えてほしい」

「…生活様式？まぁ、よかろう。儂が直々に――」

「断る！！誰がお前なんかに頼むか！！他の人で、に決まってるだろ！！！」

「酷い言われようじゃのう……流石の儂でも傷つくぞい！」

誰が好き好んでこんなピエロに頼むか！！！

まともな人を寄越せよ！

「最後の条件だ。…最後に……」

「なんじゃ？歯切れが悪いのぉ」

歯切れが悪い？仕方ないだろ。それだけ俺にとってデリケートな事なんだから……

「リリーの事を教えてほしい」
「それは儂からは言えない。パルティアに聞け」
またアークベルの口調が変わる。どこから本気に話しているのかがよく分かる。
「…分かった」
「では、ついてくるのじゃ」
そう言って、アークベルは腰を上げた。
「？どこに行くんだ？」
アークベルは楽しそうに笑う。確実に何かを企んでいる様な顔をして。
「闘技場じゃ」

〈１０〉修行の間（前書き）

「化物勇者の英雄記」を書き始めました。
第一話は１０月１０日０９時に投稿します。

本音を言うと、こっちが本命です。

「神が与えた最期の試練」よりも先に見てほしいと思っています。

〈10〉修行の間

受付の女性、パルティアは彼女が所属しているギルドマスターであるアークベルに部屋から出ていくように言われたためギルドマスターの部屋から出ていった。

部屋から出たパルティアの感情はひどく乱れている。

これも全て、あいつのせいだ！！

パルティアが怒りを顕にしている「あいつ」とはデルティネと名乗る一人の男である。

デルティネが言い出したことはパルティアのパートナーであり、ライバルであり……親友だったリリーのことだ。

……「だった」……

リリーは死んだ。そう告げられたのは二年前。当時、知っているのはごく数人だが、私は悲しみにくれ廃人も同然の状態だった。

完全に立ち直るのまでには半年以上もかかった。

…冒険者は辞めてしまったが…

パルティアは冒険者だった当時、ＳＳランクまで上り詰めた。こう言うと嫌味らしく思えるが、相当のエリートだった。

リリーと知り合ってから八年。冒険者としては四年ほどに渡り多くの依頼を共にこなしてきた。

パルティア自身が死ぬことも、リリーが死ぬこともしかしたらあるかもしれない。
だから覚悟はしていた。
…いや…していたと思っていた。
実際は先程言ったように悲しみにくれ廃人も同然だった。

いきなりリリーの名前をだして何なんだ、あいつは！！！
何故リリーを知っている？
リリーはあいつの事を知っていたか？？
何でリリーが死んで二年たった、今、来たんだ？？

パルティアはギルドマスターであるアークベルの部屋から退出し、闘技場に到着するまでの間、そんな事ばかりを考えていた。

何故、闘技場に向かっているのかと言うと、先程、部屋から退出する前にアークベルがパルティアに念話で話し掛けてきたからだ。
もちろんパルティアは念話を使えない。しかし、念話とは、どちらか片方が使えれば成り立つ。よってアークベルは念話を使えるため、成り立つ。
内容は簡単なものだった。
第一から第八までである闘技場の中の第一闘技場である「修行の間」を使えるように準備すること。

「修行の間」に着いたパルティアは、その時使っていた三十余人

の人達に申し訳ないが場所を空けてもらえるようにお願いした。
その人達は簡単に場所を空けてくれた。

ギルド内で人気の高いパルティアだからすんなり通ったのだろう。

このギルドには強者が多い。しかし、それ以上に性格が捻くれている人が異様に多い。毎日、受付で相手にしていると果てしなく大変だが、このような時には、その苦労している分が活きてくる。

…五人にお茶に誘われたんだけど……断ったけどねぇ……はぁ…いろいろ疲れるギルドよねぇ…

それにしても、マスターはやっぱり「アレ」をする気なのよね…

「修行の間」は八つある闘技場で唯一まともな場所だが、そこは修行以外にもう一つ使われることがある……

一息ついて、そんなことを考えていると、不意に扉が開いた。

「ここが闘技場の『修行の間』じゃ」

そう言ってアークベルは闘技場の扉に手を掛けた。　扉は二人並んで入ろうとすれば、互いの肩がぶつかってしまう程の大きさだ。

俺はその大きさから小さい部屋なのだろうな、と思っていたのだが……

「で、でけえ…」
かなりでかい…いや、かなりなんてものではない。もしかしたら小さな村なら入るのではないかと思う程広い。
その闘技場は所々岩が見受けられ、また全体的には円状に平地として広がっており、外周には観客席のような所があり、透明なガラスのようなもので区切られていた。
また、その観客席には三十人ちょっとの人達がいた。身に纏っている雰囲気から察するにここのギルドの人だろう。…何故かパルティアもいた。

しかしこんな、馬鹿でかい場所で何をする気なんだ？
「修行の間」という名なんだから、力試しとか？

正直、俺は内心では楽しみにしながらアークベルの説明を待つ。
「では、早速じゃが、十歩程前に出てもらえるかのう」
「？まぁ、いいけど、何をするんだ？」
「……」

アークベルは何も応えない。
俺は一応言われた通りに十歩程前に進んだ。

その瞬間、俺の後ろ…アークベルの空気が変わった。つい先程、部屋で出した重い威圧感より、さらに、さらに重く濃い空気が放たれる。気を抜くと、威圧感だけで相手の意識を飛ばせそうな本気の殺気。

その殺気をいち早く察知した俺は視線だけを後ろに向け、前方へ大きく跳んだ。

一方、アークベルは俺がいた場所に向かって大きく殴りかかっていた。一瞬反応が遅れていたら確実に当たっていた。

なんでだ??

そしてアークベルの拳が地面に突き刺さる。

ドンッ!!!

と地響きが起こる。

そして――

――フウゥ――

俺がいたところ、つまりはアークベルの拳が突き刺さった地面が象でも入るのではないか、というほど体積を音もなく――

――消した――

ただ地面を破壊したのではなく、まるで、粒子単位で破壊したように跡形もなく消した。

そして、その拳には異様な魔力が籠もっていた。何もしなくても、その魔力だけで息苦しくなるようだ。

どんな術を使ったんだ???

そんな考えが頭をよぎったが、重要なのはそこではなく、アークベルはその術で俺に本気の殺気を持って躊躇なく……殺しにかかってきたことだ。

「どういう、ことだ??」

俺は何が何だか分からない、そんな顔でアークベルに尋ねた。

「……」

しかし、アークベルは答えない。

「答えろ!!アークベル!!!」

張り詰めた空気の中、この部屋の扉がひとりでに閉まる。

門の前に立つアークベルは、まるで地獄の門番のように見える。

そして、アークベルは返答の代わりに不敵な笑みを浮かべ……消えた!!!

なっ!?どこに!??

アークベルは俺の一瞬の気の緩みを見極め、すぐさま動いたのだ。

!!!!

気付くとアークベルは俺の後ろを再び取り、殴りかかろうとしている。その拳には、先程と同じ魔力が宿っている。

今度のタイミングは俺の実力では躱せれない。確実に当たる。

俺は逃げる動作と共に腰に掛けている六つある「深海の袋」の内の二つに手を入れる。

ドン！！！

そしてまた、アークベルの拳の周辺一体が消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7497v/

神が与えた最期の試練

2011年10月10日15時23分発行